

夢の降る島シリーズ

夢見の島の眠れる 女神

【下巻】

つごもり おつき
津籠 睦月



第10章 悪夢に蝕まれる島

その夜、フィグは夢を見た。

四人の ^{フィーユ・レヴァリム} 夢見の娘 による祭のフィナーレ以降、記憶はひどく曖昧で、いつの間に眠りに就いたのか、そもそもどうやって家に帰り着いたのかさえ、まるで覚えてはいない。ただフィグはその夢の中で「これは夢だ」ということが不思議と認識できていた。

(夢、か。だからこんなに周りが見えづらいのか?)

そこはまるで深い霧の中のような、一面が ^{ミルキーホワイト} 乳白色 に霞んだ世界だった。あてもなく歩き回るうち、フィグはふと、霧の向こうに見覚えのある人影を見つけた。

(ラウラ……?)

ぼやけた輪郭だけでも分かってしまうほど記憶に刻み込まれたその姿に、だがフィグは歩み寄ることができなかった。

(ラウラ、一体誰と一緒にいるんだ?)

人影はラウラのものだけではなく、見知らぬ女性の影が、ラウラのそばに寄り添うように立っていた。

「今話したことが、この島の……そして“ ^{フィーユ・レヴァリム} 夢見の娘 ”の真実です」

見知らぬ女性がラウラに告げる。その声は第三者が立ち入ることを許さないような緊迫感に満ちていた。

ラウラはその言葉を噛みしめるように沈黙していたが、やがて静かな声でぽつりと言った。

「……そっか。そういうこと、なんだ。じゃあ私があなたの元まで行かなくちゃ、^{コシュマアル} 悪夢 は止まらないんだね」

(何の話をしているんだ、ラウラ。 ^{コシュマアル} 悪夢 は鎮まったじゃないか。お前たちの夢見の力で……)

フィグが二人の会話を深く吟味する間もなく、女性はラウラの前で耐えられないとばかりに顔を覆った。

「ごめんなさい。私があなたを選んだばかりに、あなたは全てを失ってしまいます」

悲痛な声での謝罪に対し、ラウラはただ「ん～」と首をひねる。そしていつものあっけらかんとした調子で口を開いた。

「それはちょっと違うと思うな。大丈夫。私の大切なものは、運命なんかに奪われたり

しないよ」

その声には悲愴感などカケラも漂ってはいない。

「それに、私がやらなきゃ島が壊れちゃうんでしょ？そんなの嫌だし。だったら選択肢は一つしかないかなって思うんだけど」

「ラウラ……」

女性は感銘を受けたようにその名を呼ぶ。だが次の瞬間、ハッとしたように鋭くこちらを振り返った。

「そこに、誰かいるのですか？」

その問いは紛れもなくフィグに向けられたものだった。呼びかけられるとは思っていなかったフィグはうろたえる。

「は!? いや、俺は……」

「その声……フィグ!? 何でここにいるの!？」

驚いたように声を上げるラウラに視線を戻し、女性は悲しげに呟いた。

「そうでした……。あなたには ^{ホンシエン} 紅線 で結ばれた相手がいるのでしたね。その絆に導かれ、こんな場所にまで引き寄せられてしまうほど、強い運命で結ばれた相手が……」

女性はラウラの肩に手を乗せ、その耳元に顔を寄せる。

「可哀相ですが、その絆は……」

フィグの耳には半分しか聞き取れなかったその言葉に、ラウラが衝撃を受けよろめく気配が伝わってきた。

「そんな……どうして!？」

「このままではその絆が呪いと化してしまうからです。あなたの運命が選ばれた今、その絆は最早約束された幸福の証ではなく、互いを縛る枷でしかないのですから……」

「そっか……。私にはもう、フィグと結ばれる資格が無いんだ。でも……嫌だよ。私自身の手でフィグとの絆を断ち切るなんて、できないよ。そんなの、ひど過ぎるよ……！」

ラウラは女性の服に取りすがり、震える声で訴える。女性は頷き、そっとラウラの手を外した。

「分かりました。ならばその役目は私が請け負いましょう」

言って、女性はフィグの方へと向き直り、ゆっくりと歩を進める。フィグはわけが分からないながらも、直感的に「まずい」と感じ、逃げ出した。だがすぐにその足が、何か引張られ、つんのめる。驚いて足首を見ると、そこには今まで無かったはずの赤い縄が結びつけられていた。

(なんだ、この縄……どこかで見たような気が……)

「逃げてでも無駄です、フィグ・フィーガ。ここは夢の中。私の支配する領域。あなたに逃げ場などありません」

女性はフィグの足首から伸びた縄をたぐり寄せながら近づいてくる。フィグは焦った。

（やばいな……。足に縄つけられてるんじゃ、どの道逃げられっこない。どうすればいいんだ。どうすれば……）

考えている間にも、女性はじりじりと近づいてくる。

「……ごめんなさい、フィグ・フィーガ。でもこれは、あなたのためでもあるのです。成就しない恋に縛られたまま一生を送るより、新しく運命を結び直す方があなたにとっても幸せでしょうから……」

穏やかながら有無を言わせぬその声音に、フィグは焦っていたことも忘れ反発した。「は!? 何言ってんだ!? 俺の幸せ? そんなの、あんたが決めることじゃねえだろうがっ!」

女性はその言葉に息を呑んで立ち止まる。瞬間、フィグは閃いた。

（そうか!“夢”だ! 夢なら目覚めればいいんじゃないか! ……よし、起きろ、俺。こんなわけの分からない悪夢から、さっさと目を覚ますんだ!）

フィグは必死に念じる。そして、その願いはすぐに叶った。

「起きろ……っ!」

自分自身のその声で、フィグは飛び起きた。しばしベッドの中で荒い息を整えた後、フィグは首を傾げる。

（何だ? 俺、どうしてこんな必死になって起きようとしてたんだ? 嫌な夢でも見てたのか?）

見たはず夢の記憶は、霧の奥に隠れてしまったかのようにぼんやりして、最早何となく嫌だったという感覚しか残っていない。だがフィグはそれを特に気に留めることもなかった。

（ま、夢の内容を忘れるなんて、よくあることだしな……）

頭の中にまとわりつく“何となく嫌な感覚”を振り払おうとするように、窓辺に立ちカーテンの端を手取る。

いつものように勢い良くそれを開け……、フィグは眼下に広がる光景に絶句した。

「……何だ、これ。いつの間にこんなことに!？」

いつもであれば朝日に碧く煌めいているはずの海は、泥のような原油の膜に覆われ黒く澱んでいた。白い砂浜は灰色のコンクリートで固められ、岬を彩っていた草花たちは皆枯れて茶色く変色していた。そして、変わり果てた景色のそこかしこから立ち上るのは、昨夜の祭で見た黒い泡。

「……^{コシュマアル}悪夢、^{コシュマアル}なのか？ どういうことだ？ 悪夢は昨夜、全部消えたんじゃないのか!？」

叫び、フィグはハッと顔色を変える。

（^{コシュマアル}悪夢は確か、^{フィーユ・レヴァリム}夢見の娘を狙っていたはず……！ ラウラは今、無事なのか!？）

フィグは机の引出しから^{セカンドサイト・テレスコープ}千里眼鏡を引っ張り出し、^{レム・ストーン}夢鉱石で作られた^{ダイヤル}目盛調節器に触れながら叫んだ。

「花曇りの都の^{レグナス}小女神ラウラ・フラウラの姿を映せ！」

覗き込んだレンズに映し出されたのは、^{レグナスコラ}小女神宮の窓の一つだった。慎重に^{ダイヤル}目盛調節器を回すと、ぼやけていたピントが合っていき、ガラス窓の向こうでラウラが忙しく動き回っているのが見えた。とりあえずの無事を確認したフィグは、ほっと安堵の息を吐く。

だが、レンズ越しにラウラの行動を見ていくうちにその表情はだんだん険しいものへと変わっていった。

（何だ……？ 大きなカバンに、ランタン、^{コンパス}地図、方位磁石に、携帯食料……？ これじゃまるで旅支度じゃないか）

ラウラは黙々とカバンに荷物を詰め込んでいた。しかもその顔には、ひどく思いつめた表情が浮かんでいる。まるで、二度と帰って来られない旅にでも出掛けるように……。

それ以上黙って見ていることができず、フィグは部屋を飛び出し階段を駆け下りた。そのままカバンとデッキブラシを手に、家を飛び出そうとする。だが直前で制止の声がかかった。

「待って。どこへ行くつもりなの？ 外がどんな状況なのか分かってる？」

振り向いた先に母親の姿を見つけ、フィグは凍りついたように動きを止める。

「分かってる。でも、ごめん。どうしても行かなきゃ駄目なんだ。今すぐラウラの所へ行かなきゃいけない気がするんだ」

その言葉に母親は深々と溜め息をついた。

「やっぱりあんた、ラウラ様と会ってたのね。……って言うか、まあ知ってたけどね」

「……………え？」

「だってラウラ様のおんたに対する態度、一年に一度里帰りでしか会えない相手にする

態度じゃなかったもの。小さい頃、駆け落ちまでした仲だものね。今は恋愛御法度でも、あの子がいずれ小女神宮を出た後、うちに嫁に来てくれるならいいかって、釘は刺しつつ知らないふりをしてあげてたのよ」

「そう……だったのか」

バレていないと思っていたフィグは後ろめたさを隠すように目を逸らす。母親はそんなフィグの態度に苦笑し、おもむろに項に手をやった。首にかけていたものを外し、フィグの手に渡す。それは母親が肌身離さず身につけていた羽根の形をしたペンダントだった。

「持って行きなさい。母さんがレグナスコラ小女神だった頃使っていたシルヴァースプーンワンド銀の匙杖よ」

「こんな大事な物……！それに、行っていいのかよ!？」

止められると思っていたフィグは驚きを隠せない。母親は苦笑したまま告げる。「本当は止めたいわ。今外へ出れば、何が起こるか分からないもの。もしかしたら、もう二度と会えないかも知れない。……でもあなた、いくら止めたって行ってしまおう？あなたが七才の時、ラウラ様を連れて駆け落ちしたあの日のように……」

フィグを見つめる母親の眼差しは、何もかもを悟っているかのような深い色をしていた。

「いいのよ。あなたの人生はあなただけのもの。あなたがそう決めたのなら行きなさい。私はただ、あなたの選んだ道を受け入れるわ」

フィグは母の顔を見つめ返すことしかできなかった。言いたいことは沢山あるような気がするのに、上手く言葉にできない。しばらく言葉を探して……それでも結局、フィグが口にできたのはたった一言だけだった。

「……ありがとう、母さん」

「今までありがとう、キルシェちゃん」

大きく膨らんだカバンを肩にかけ、ラウラは深々と頭を下げる。

キルシェはそんなラウラの両手を引き止めるようにつかんだ。

「待ってよ。本当に行っちゃうの？一緒に行っちゃダメなの？こんなのっておかしいじゃない！あんた一人に危険な役目を負わせるなんて！」

必死に訴えるその顔は、今にも泣き出しそうに歪んでいた。ラウラは苦笑し、ただ静かに告げる。

「ごめんね。でも仕方ないんだよ。これは真のフィーユ・レヴァリム夢見の娘にしかできないことだっ

て言われたし」

数百年に一度、^{レグナリア・レヴァリム} 夢見の女神 の力が弱まるたびに、島では一人の^{レグナース} 小女神が選ばれ、ある重大な役割を担ってきた。

「^{フィーユ・レヴァリム} 夢見の娘」とは本来、その役割を負わされた^{レグナース} 小女神に与えられる称号であり、島ではその功績と感謝の気持ちを忘れぬために年に一度、最も強い^{レグナース} 夢見の力を持つ小女神に^{フィーユ・レヴァリム} 夢見の娘 の役を演じさせ、称えるのだ。

「……もう行かなきゃ。早くしないと、どんどん島が壊れていっちゃう」

言いながら、ラウラは天を仰ぎ、きゅっと拳を握る。^{レヴァリム} 夢見 島の上空では今、明らかな異変が起きていた。

それは青い空に縦横無尽に走る、数えきれないほどの白い線。一見、空に描かれた模様か一面に張った蜘蛛の巣のようにも見えるそれは、“亀裂”だ。

それはゆっくりと、だが確実に島の空を蝕んでいく。

「これが、^{むげんはくり} “夢現剥離”……」

ラウラの視界の先では、まるで卵の殻が剥がれていくように、一箇所、また一箇所と空が剥がれ落ちていく。剥がれた空は白銀の光の粒となって霧散し、後には一点の光も無い深淵の闇がぽっかりと口を開けていた。

ラウラは昨夜の夢の中で聞いた話を脳裏に蘇らせていた。

『この島は、^{レグナリア・レヴァリム} 夢見の女神 の箱庭。^{レグナリア} 女神 の夢見の力によって支えられています。ゆえに、女神の力が弱まれば、島を構成する要素はバラバラに分解された上、二つに引き裂かれ、島はその存在自体を保ってられなくなります。それが“夢現剥離”……。それを防ぐことができるのは、ラウラ……あなただけなのです』

ラウラはキルシェの手を握り返し、安心させるように微笑んだ。

「大丈夫だよ。私、絶対にこの島と皆を守ってみせるから。キルシェちゃん達は安全な場所において、私がちゃんとこの役目を果たせるよう祈ってて」

キルシェは何も言えず、ただきつくラウラの身を抱きしめた。

必死に嗚咽をこらえる気配に気づき、ラウラもただ何も言わず、震える腕にすがりついて泣いた。

「あなたはお別れを言わなくてもいいの？」

^{レグナスコラ} 小女神宮の門前で抱き合うふたりを窓越しに眺めていたアメイシャに、アプリコットが声を掛ける。

「そう言う君はどうなんだ？」

言いながら振り返ったアメイシャの瞳に映ったのは、涙で目を赤く腫らしたアプリコットの姿だった。

「私はもう済ませたわ。最後は親友のキルシェに譲ろうと思って」

「.....私などが挨拶に言ったところでラウラは喜ぶまい。大事の前にラウラの心を乱したくはない」

目を伏せ、自嘲気味にそう言うアメイシャに、アプリコットは苦笑する。

「まったく、最後まで意地っ張りなんだから。ラウラはあなたのこと、悪く思ってなんかいないわよ」

「あの子がどう思っていようが、私があの子にしてきたことは変わらない」

言ってアメイシャは再びラウラに視線を向け、寂しく微笑んだ。

「私はあの子に救ってもらった。それだけでもう充分だ。これ以上は望まない。私はただ、ここから祈るだけでいいんだ」

アプリコットはアメイシャのその頑さに「仕方がないわね」とでも言いたげにため息をつく、黙ってその隣に寄り添った。

キルシェと別れ、^{レグナスコラ}小女神宮を出、ラウラは潤んだ目をこすりながら都を囲む小川を渡った。

花の香りの漂う砂漠をひとり歩き、しばらく行ったところでラウラは立ち止まった。

カバンを探り、中から予め用意しておいたピンク色の紙ヒコーキをいくつも取り出す。

「島風よ、この手紙を届けて。皆へのお別れの手紙を。お母さんと、お父さんと、フィーガのおじさん、おばさんと、それから.....」

言いながら、紙ヒコーキを天高くへ向け次々と放っていく。だが、最後のひとりの名を口にしようとしたところで、ラウラはぴたりと動きを止めた。

「フィグ.....には、まだ出せないよね。今から追いかけて来られたら、追いつかれちゃうかもしれないし.....」

手の中にひとつだけ残った紙ヒコーキを壊れないようにそっと握りしめ、ラウラは何かを振り切るように表情を変え、再び歩き出した。

痛々しいほどに張り詰めたその背中に、ふいに声が掛けられる。

「どこへ行くんだ、ラウラ」

ラウラはハッとして視線を上げた。そこには一本の傘にぶら下がり、ふわふわと空から降りてくるフィグの姿があった。

「フィグ……!? どうして……？」

「お前なあ、俺を出し抜いて一人で旅に出ようなんて甘いんだよ。旅立つ時は二人一緒って約束しただろ？」

その言葉に幼い日の情景が蘇り、ラウラは泣きそうな顔で首を横に振った。

「違うよ、フィグ。これはあの時約束したような楽しい冒険なんかじゃないんだよ。それに、フィグはもうその夢、諦めたって……」

フィグはふわりと葬花砂漠に降り立ち、ラウラの頭をぽんと叩いた。手に持っていた傘は一瞬のうちに柄に銀の羽根飾りのついた ^{スプーンワンド} 匙杖 になる。

「夢はそう簡単に諦められるもんじゃないって言ったのはお前だろ、ラウラ。それに俺の夢より何より、お前が一人でどこかへ行っちゃうのが嫌なんだよ。どうしても行かなきゃいけない旅だって言うなら、俺も一緒に連れて行けよ」

「ダ、ダメだよ。私一人で行かなきゃダメなの。危ないし、それに……」

ラウラはしどろもどろに拒絶しようとする。だがその瞳は迷うように揺れていた。

フィグに会わずに行こうとしたのは、会えば心が揺らぐことが分かっていたからだ。会ってしまえば、離れがたくなることが分かりきっていたからだった。

「危ないなら余計にお前一人で行かせられないだろう。ダメだと言っても俺はついて行くぞ」

ラウラの顔がくしゃりと歪む。それまで必死に堪えてきた不安や心細さが一気に溢れ出してしまふ。

「どうして来ちゃうの？一人で耐えなきゃって思ってたのに……そんなこと言われたら、我慢できなくなっちゃうよ。ダメなのに、危ないのに……一緒にいて欲しいって思っちゃう……っ」

涙の浮かんだ瞳でなじるラウラに、フィグは悪戯っぽい笑みを返した。

「べつにいいだろ。こんな状況じゃ一人で行こうが二人で行こうが誰も見てる奴なんかいないさ。それでも、もしバレて怒られそうになったら、俺だけが叱られてやるよ」

ラウラはしばらく迷うようにフィグの顔を見つめた後、何かを決意したような表情でうなずいた。

「ありがとう。フィグのことは絶対に私が守るから、一緒に来て欲しい」

その言葉にフィグはぴくりと片眉を跳ね上げる。

「ばっか。お前、^{フィーユ・レヴァリム} 夢見の娘 になったからって調子に乗るなよ。俺がお前を守ってやるんだろが」

「^{わたし}“真の夢見の娘”の役目はね、^{レクナリア・レヴァリム} 夢見の女神 の元へあるものを届けに行くこと。今この島に起きていることは全て、^{レクナリア} 夢見の女神 の御力が不安定になっていることが原因なの。だからそれをどうにかしないことには、何度消してもまた新たな^{コシュマアル} 悪夢 が生まれちゃうんだ」

そのラウラの説明を裏付けるかのように、今も葬花砂漠のあちらこちらで^{コシュマアル} 悪夢 が黒い泡を立ち上らせている。

「^{レクナリア} 女神 の元って言ったって……お前、^{レクナリア・レヴァリム} 夢見の女神 がどこに眠っているのか知ってるのか？」

フィグの疑問に、ラウラはしっかりと首を縦に振ってみせる。

「うん。教えてもらった。^{レクナリア} 女神 はあそこにいるんだよ」

言ってラウラが指さしたのは、島の中央にそびえ立つ^{ユグドラシル・スタンプ} “世界樹の切株”だった。フィグは軽く目を見張る。

「……確かに、^{レクナリア} 女神 が眠るにはふさわしい場所だな。だが、どうやって行くんだ？あの山は四方を断崖絶壁の谷に囲まれてるんだぞ。おまけに島は今こんな状況だ。たどり着くまでの間に^{コシュマアル} 悪夢 に取り込まれでもしたら洒落にならないぞ」

「大丈夫。だって私は^{フィーユ・レヴァリム} “夢見の娘”だもん」

ラウラは髪留めを外し、一瞬で^{シルヴァースプーンワンド} 銀の匙杖 に変化させた。

「夢より紡ぎ出されよ！^{アラビアン・ナイト} 千夜一夜物語より“魔法の絨毯”！」

ラウラが杖を振ると、先端から七色の光が飛び出した。それは互いに絡まり合い、華麗な模様を織り成し、やがて七色の光を帯びた宙に浮く絨毯へと変貌を遂げた。

「夢追いの祭の時にも見たが……お前、夢雪無しで夢を紡げるようになったんだな。おまけに光の色も違う。それが^{フィーユ・レヴァリム} “真の夢見の娘”の力なのか？」

「……うん」

ラウラは目を伏せ、それ以上を語らなかった。

「乗って、フィグ。とりあえず谷の近くまではこれで行こう」

^{コシュマアル} 魔法の絨毯は二人を乗せ、^{コシュマアル} 悪夢 の泡の届かぬ高さを飛んでいく。

葬花砂漠を一気に越え、以前ラウラを花曇りの都へ送った時とは逆の進路をとり花歌の園へと差しかかった時、フィグは愕然と目を見開いた。

「何なんだ、これは!？」

かつて風に揺れながら優しい歌を合唱していたはずの花たちは、今や^{コシュマアル} 悪夢 により

黒く変色し、歌とは違うモノを響かせていた。

どこか機械じみた感情に乏しい声で囁かれるそれは、侮蔑や嘲笑、そして悪意に満ちた言葉の羅列だった。それが幾重にも重なり合い、騒音となって容赦なく耳に飛び込んでくる。

『キモイ』『ウザイ』

『オマエナンカ、イキテイル価値モナイ』

『キエロ』『シネバイイノニ』

否応なしに耳に入り込み鼓膜を震わせるそれは、まるで形を持たない凶器のように心を打ちのめし、精神を冷たく切り刻んでいく。ただその場に立ってその“音”に囲まれているだけで、徐々に生きる気力を奪われていくようだった。

「何だ、これ。……頭がおかしくなりそうだ！」

フィグは耳を塞ぎ、それらの“音”を振り払おうとするように必死に頭を振る。ラウラは今にも泣きそうな目で花たちを見つめた。

「……そうなんだ。これが“悪夢”。そしてきっと、現実でもあるんだね」

「どういうことだ？」

フィグの問いに、ラウラは振り向かないまま答える。その声は悲しみに震えていた。

「これは、私たちが“向こう側”と呼ぶ場所にいる人たちが見ている悪夢。そして、現実。^{コシュマアル}“悪夢”はね、“向こう側”の人たちの抱いている恐怖心や嫌悪感や不信感や……そういう、あらゆる^{マイナス}負の感情が形になったもの。形の無いそれが、女神様の“夢”を通してこの島に伝わって来て、具現化したものなんだよ」

「じゃあ、今まで島に現れてきた^{コシュマアル}悪夢も、全て“向こう側”の人間が生み出したものなのか!？」

フィグは戦慄する思いでラウラに問う。

「……うん。今までは、こうして島に現れる前に女神様の御力で浄化されてきたんだけど、女神様の御力が不安定になっているせいで、浄化しきれなくなって、島になだれ込んで来ているんだよ」

「そんな……。俺だって、向こう側が夢と希望に満ちた世界だなんて思っちゃいなかったさ。けど、それにしたって……。こんなに醜くて、冷たいものなのか？向こう側は……」

「嫌わないであげて、フィグ。確かに^{このこ}悪夢たちは、私たちが攻撃しているようにも見えるけど……。けど本当は、苦しくて、もがいているだけなんだよ。^{コシュマアル}悪夢の源は、あらゆる人たちの心の悲鳴や、苦しくてどうにもならない気持ち。だから希望や救いを求めて、明るくてきらきらした“夢”に寄って来るんだよ。だけど私たちの紡ぐ夢は、^{このこ}悪夢

たちを救ってあげられるほど強いものばかりではないから……、取り込まれて、逆に
コシュマール
悪夢を増大させてしまったりするんだけど」

ラウラのその言葉を証明するかのよう、よく耳を澄ませば悲鳴が聴こえる。冷たく攻撃的な言葉の中に、溶け混じって消えてしまいそうにか細く、悲痛な声が聴こえる。

『タスケテ』『ダレデモイイカラ僕ヲ見ツケテ』

『ドウシテ誰モ、タスケテクレナイノ』

『モウ誰モ、シンジラレナイ』

『イツソ全部、キエテシマエバイインダ。皆モ、僕モ』

ラウラは魔法の絨毯の上に立ち上がり、決意を秘めた眼差しで口を開いた。

「助けるよ。……ううん、本当に助けられるかどうかは分からないけど、でも、私にできる限りのことをする。だから、私は夢を紡ぐよ」

ラウラは大きく息を吸い込むと、嘲りと嘆きに揺れる花々へ向け シルヴァースプーンワンド 銀の匙杖 を一閃させた。

「夢より響き渡れ！ “ イツツ・ア・スモール・ワールド 小さな世界 ”！」

ワンド 杖の先から七色の光が放たれ、四方へと飛び散っていく。それはまるで波紋が広がるように、花園の果てまで広がっていった。

光を浴びた花々は、元の色を取り戻し弾むような声で歌を歌い出す。花園を満たしていく明るいメロディーに、フィグは呆然と聞き入った。

それは、幼い頃に聴いたことのある歌だった。幼い頃、何の気無しに歌い、歌詞の意味など深く考えもしなかった歌だった。

“世界は一つ”と歌う希望の声に包まれながら、ラウラはぽつりと呟いた。

「世界中、どこで生まれても、育ちも考えも何もかも違っていても、みんな、楽しいことがあれば笑うし、悲しいことがあれば泣く……根っこの部分は何も変わらない、同じ人間なのにね。誰もがみんな、それぞれに与えられた人生の中で必死に“今”を生きているだけなのにね。それさえ分かっていたら、どんな違いがあっても、結局は分かり合えなくても……、それでも、ままたらない世界で一緒に足掻いている者同士、悲しみや喜びを共有できるはずなのに……。どうしてすれ違ったり、傷つけ合ったりしちゃうんだろうね……」

「ラウラ、お前は……この歌を、そんな風に聴いてきたんだな」

フィグの声に、ラウラはそれまでの深刻な態度を照れくさく思っただけか、誤魔化すように小さく笑った。

「子どもっぽい、かな？でも、私以外にもそんな風に思ってる人がいたからこそ、こん

な歌が作られたんだと思うんだ。どんな時代にだってきっと、希望を信じて夢を謳う人はいるよ。私もそれを信じて、繋いでいきたいんだ。途絶えないように、消えてしまわないように、夢を伝えていきたいんだ」

花たちの歌う“イツ・ア・スモール・ワールド 小さな世界”に送られて、魔法の絨毯は花歌の園を抜けていく。だが花園を出る間際、地からポツと黒い泡が湧いて、花々の一部を再び黒く染め上げた。

『信ジナイ。皆仲良クナレルナンテ、タダノ夢ダ。現実的ジヤナイ』

ラウラの言動を否定するかのようその声に、フィグは気遣わしげにラウラを振り返る。だが、ラウラは傷ついたような様子も哀しげな顔も一切見せず、ただ静かに前を見つめていた。

「『ただの夢』か……。確かにそうかも知れないね」

ラウラは花たちに語りかけるように静かに唇を動かす。

「だけど、どんなに具体的な目標も、どんなに途方もない理想も、叶えられるまではみんな『ただの夢』でしかないよ。今、当たり前目の前にあるものだって、始まりはどこかの誰かの『夢』だったんだ。自動車も、飛行機も、電灯も、数多くの病気を治せる医療も、国の仕組みやルールを変えることさえも……。時には他人に嘲笑わらわれて、時には壁にぶつかってくじけそうになりながらも、必死に夢を叶えてきた人たちがいるから、今のこの世界があるんだ。誰もが皆、叶うかどうか分からないまま夢を追いかけて……。そうして積み重ねられてきた努力や苦勞の一つ一つが、歴史や文明を紡いでいくんだよ。頑張っても叶えられない夢は確かにあるよ。でも、夢を見ることすらしなかったら何も始まらない。誰かが世の中を変えてくれるのを待ち続けて、期待を裏切られたと嘆くより、私は、笑われても夢を追いかける方を選びたい。そうじゃないと、少なくとも私は、後悔すると思うから……」

黒く染まった花たちは、ラウラの言葉にふるり、と震えた。だがその後を見届けることなく、絨毯は花園を通り過ぎていった。

ユグドラシル・スタンプ

世界樹の切株はその周囲を夢鉱石の谷や流星の谷などから成る円形の深い谷に囲まれ、その谷をさらに小高い山々が円く囲んでいる。ラウラは夢鉱石の谷の外側にある山の一つで絨毯を止めた。

そこは草木の一本も生えない岩山で、斜面にはぽっかりと暗い洞窟が口を開けている。それは人の手により少しずつ掘り進められてできた坑道で、通称“瑠璃洞穴”。山のー

部がとてつもなく巨大なラピスラズリでできており、時折それを削り出しに訪れる者はあるが、普段はほとんど人の行き来の無い場所だ。内部は蟻の巣穴のように枝分かれしており、その中には岩山を貫いて反対側の斜面へと繋がるトンネル状の道もできている。

「おい、こんな所に入ってどうするんだ？トンネルを抜けたところで谷の真上に出るだけぞ」

「大丈夫。ここが一番の近道なんだよ。ついて来て」

ラウラは躊躇もなく洞穴に足を踏み入れる。粗く削られただけの坑道には灯りなど一切無く、暗闇に包まれていた。

「夢より紡ぎ出されよ！“[ウィル・オー・ザ・ウィスプ](#)”！」

ラウラは叫び、^{シルヴァースプーンワンド}銀の匙杖を振る。杖の先からはいくつもの光球が生まれ、ラウラの周囲を明るく照らした。それを見て、^{シルヴァースプーンワンド}フィグも^{レネジウム}銀の匙杖の先に夢雪を振りかけ叫ぶ。

「夢より紡ぎ出されよ！“[イグニス・ファトゥス](#)”」

杖の先からは妖しげにちらちら揺れる鬼火のような光の球が飛び出してくる。

身体の周りをふよふよと漂う光の球を松明代わりに、二人はトンネルを奥へ奥へと進んでいった。

周りの壁は全て[ラピスラズリ](#)。まるで宵闇の空のような藍色の石の壁の中で、[パイライト](#)の微細な粒が光に照らされ、金の星を散りばめたかのようにきらめく。まるで夜空の中を散歩しているような不思議な空間を一時間ほど歩き続け、二人はやっとトンネルを抜けた。

そこは、山の斜面を平らに整備して造った小さな展望台だった。眼下には急峻な崖と^{ユグドラシル・スタンプ}その下に広がる夢鉱石の谷、谷を挟んだ向こう側には世界樹の切株一一。景色は絶景と言うにふさわしいものだったが、つまりはこの先どこへも行けない行き止まりだ。空を飛んで向こう側へ渡ろうにも谷の上には不規則な風が逆巻いていて、下手な乗り物では風に煽られ墜落しかねない。

フィグが「どうするんだ？」という顔で振り返ると、ラウラは崖の手前まで歩を進め、杖を振った。

「夢より紡ぎ出されよ！七夕伝承より“カササギの渡す橋”！」

杖から飛び出した七色の光が次々と鳥に変わり、谷の上に一直線に並んでいく。無数に並べられた翼は、やがて谷の兩岸をつなぐ一本の橋となった。七夕の夜、織姫と彦星が再会できるよう天の河に架けられるという伝説の橋だ。

まるで手すりの無い吊り橋のようなその橋に、ラウラはごくりと唾を呑み込んだ。

「……すごく、高い。しかも長いよ……」

「でも行くしかないだろ。自分で紡いだくせに何ビビってんだ。マイナスイメージは
レクリュスタルム
夢晶体 に悪影響を及ぼすんだからしっかりしとけよ」

「うん。それは分かってるんだけど……。でも高い所恐いっていうのは本能的なもの
だし……」

「だったら恐くないように橋の横幅をもうちょい補正しろよ。あと、この橋は一人や二
人渡ったくらいでびくともしない頑丈なものだってちゃんとイメージしとけ」

厳しい口調で次々と注文を出しながらも、フィグは当たり前のようにラウラに手を差し出す。

「ほら、手え引っ張ってってやるから。行くぞ」

ラウラは一瞬目を見開いた後、満面の笑みでフィグの手を握りしめた。

「うんっ」

何の気なしに手を差し出し、それに応えてラウラがおずおずと手を握ってきた瞬間、触れた手のひらから痺れるような甘酸っぱい感覚が走り抜け、フィグは戸惑った。

同時に、祭前日の浜辺での光景が脳裏に閃くように蘇る。

忘れていたわけではないが、これまで無意識のうちに考えないようにしてきたことをうっかり意識してしまい、フィグは今更ながらに動揺する。

「じゃあ……行く、か」

心の内を悟られぬよう、わざと素っ気なくそう言って、フィグは橋を渡りだす。心臓がやけに大きく脈打っているが、それが高い橋の上を歩いているせいなのか、別の何かのせいなのか、フィグには判別できなかった。

「うん」

答えるラウラの声には何故かいつもの元気さが足りないように感じられた。振り返れば、フィグの耳が真っ赤に染まっていることに気づいたラウラの、恥じらいと照れを何とか噛み殺そうとして、しかし全くできていない表情を確認できたはずだが、ラウラの姿を極力見ないよう前だけを向いて進むフィグはそれに気づくことができなかった。

(何だ、今の元気無さげな声。もしかして俺、嫌がられてないか?……やっば、あの時はいろいろとやらかしちまったよな。あのこと結局、こいつはどう思ってんだ?『結婚してもいいくらい好き』とは言われたけど、こいつ精神的にはまだまだお子ちゃまっぽいしな……)

そんなことをぐるぐると考えながら橋の三分の二ほどまで渡った時、ふいにラウラが

後ろから硬い声で問いかけてきた。

「……ねえ、フィグって、走るの得意だったよね？」

「は!? ああ、まあ、得意な方だが……」

質問の意図がまるで分からないままとりあえず答えると、ラウラは硬い声のまま言葉を続ける。

「あのね……、ちょっと橋を渡るスピード、速めた方がいいかも。私達が通ってきた後ろの方……なんかちょっとずつ、黒くなってる気がするんだけど」

「は!?」

驚いて振り向くと、橋の出発地点の辺りに見覚えのある黒い泡がぷくぷくと浮いているのが見えた。

コシュマアル
「“悪夢”か!? まさか、この橋を染める気なのか!?」

見ている間にも泡は橋を構成するカササギたちに取りついていく。その軀は黒く染まり、別のものへと変貌していく。

「カササギたちが……カラスに変わってく！」

ラウラが悲鳴のような声を上げた。

カラスに変わった鳥たちは、橋の形を保つことを放棄し、次々と空に飛び立っていく。

「走って! フィグ! 橋がなくなっちゃう前に向こう岸に渡らないと！」

「ああ！」

フィグはラウラの手を強く握り直すと、カササギの橋の上を必死に走り出した。

ふたりの激しい足音と荒い呼吸、背後で飛び去るカラスたちの羽音ばかりがその場に響く。

「フィグ、手を放して……っ。私を引っ張ってたら、フィグまで遅くなっちゃう……っ」

「ばかっ! そんなこと、できるわけないだろ……っ！」

コシュマアル
悪夢の浸蝕は徐々に速度を上げていく。フィグも全力で走ってはいるが、元々運動の得意ではないラウラの手を引いているため思うようにスピードを出せてはいなかった。

「大丈夫っ、私なら、レマギア 夢術で何とかするから……っ。足場がなくなっても落ちて死なないように頑張るから……っ」

コシュマアル
「悪夢に追いつかれること前提で言うなよ！」

フィグは舌打ちすると、腰にぶら下げていたガラス瓶の蓋を走りながら片手で器用に開け、中に詰まっていたレネジェム 夢雪をつかみ出して叫んだ。

「夢より紡ぎ出されよ！『西遊記』より“如意棒”！」

フィグの手の中で白銀の光が弾け、美しく装飾された一本の棒が出現する。フィグはそれを片腕で構え、再び叫んだ。

「伸びろっ！如意棒！」

如意棒は白銀に光りながら ユグドラシル・スタンプ 世界樹の切株 へ向け矢の速度で伸びていく。やがてそれは山の斜面に到達し、深々と地に突き刺さった。

「つかまれ！ラウラ！」

「う、うんっ！」

促され、ラウラはつないでいた手を離し、両腕で如意棒にしがみついた。

「縮め！如意棒！」

フィグの叫びに応じて、如意棒はふたりをぶら下げたまま ユグドラシル・スタンプ 世界樹の切株 の方へと猛スピードで縮んでいく。

「ひゃあああああっ！」

ラウラはその速度にたまらず悲鳴を上げた。

「やだっ！ちょ……っ、速過ぎるよっ！つかまってられない……っ！」

「我慢しろ！もう少しで着く！」

「でも、汗で手が滑って……っ、あ……っ！」

あとほんの数mで斜面に到達するという寸前で、ラウラは手を滑らせた。その指が如意棒から離れ、ラウラは谷底へ向け落ちていく。

「嫌あああああっ！」

「ラウラっ！」

先に斜面に辿り着いたフィグはすぐさま如意棒から手を離し、再び腰のガラス瓶に手を突っ込んだ。

「夢より紡ぎ出されよ！“ラプンツェル 髪長姫 ”！お前の髪を垂らしてくれ！」

その場に レネジウム 夢雪 をばら撒くと、光が弾け、途方もなく長い髪の乙女が現れた。彼女が頭を振ると、その髪は白銀の光を振り撒きながら谷底へ向かって零れ落ち、落下していくラウラの身を絡め取るように巻きついていく。

フィグはラプンツェルと二人がかりで何とかラウラの身を引き上げる。

「……ありがとう、フィグ、ラプンツェル」

ラウラが礼を言うと、ラプンツェルは微笑みながら白銀の光の中に消えていった。

「さて、と。ようやく ^{ユグドラシル・スタンプ}世界樹の切株 に着いたわけだが……」

フィグは言いながら雲に包まれた ^{ユグドラシル・スタンプ}世界樹の切株 の頂上付近を見上げ、しばらく沈黙した。

「これからどうするんだ？地道に登山していくのか？」

なるべくなら他の手段があって欲しい、と言いたげな顔でフィグはラウラを見た。

^{ユグドラシル・スタンプ}世界樹の切株 は草木の一本も生えていない岩山で、しかもその斜面はかなりの傾斜を持っている。普通に登山するとしたら、とてつもない苦難が待ち受けていることは目に見えていた。

「ううん、道を開いてもらうから大丈夫。ちょっと待ってて」

落下の衝撃から立ち直り、ようやく呼吸を整えたラウラがその場に立ち上がり、

^{ユグドラシル・スタンプ}世界樹の切株 の頂へ向け声を張り上げる。

^{レグナリア・レヴァリム}「 夢見の女神 様！ ^{フィーユ・レヴァリム} 夢見の娘 ・ラウラが来ました。あなたの元へ続く道を開いてください！」

直後、何もなかったはずの虚空から蛍火のようにふわふわと無数の虹色の光が湧き出してきた。それは螺旋状に世界樹の切株を取り巻き、何かの形を成していく。

やがて光が治まると、そこには ^{ユグドラシル・スタンプ}世界樹の切株 の頂へ向かって伸びる螺旋階段が出来上がっていた。しかもその材質は鉄でもコンクリートでもなく、オパールのように光の加減で虹色にきらめく白い石。おまけにその階段は何の支えも無く宙に浮かんでいた。

^{レグナリア・レヴァリム}「これが…… 夢見の女神 の元へ続く道？」

「うん。行こう、フィグ。ぐずぐずしてたら、また ^{コシュマアル}悪夢 に襲われちゃうし」

「ああ」

頷き、フィグはラウラに続いて虹色の石の階段を上り始めた。

整然と並んだ石の階段とは言え、それは山を取り巻き延々と続いている。初めのうちこそ軽口を叩き合っていた二人も次第に口数が減り、今はひたすら黙々と階段を上り続けていた。

^{ユグドラシル・スタンプ}階段の真下には 世界樹の切株 を取り囲む深い谷、そしてその谷を覆う緑の森が見えている。そしてそのさらに外側には谷をドーナツ状に取り囲む山々が、折り重なるように青々と連なっていた。

これまでに見たこともなかった高所からの絶景に、フィグは思わず足を止めた。まる

で天上からの眺めのようなその景色、吹き渡る涼やかな風は、一時フィグに疲労や不安を忘れさせた。これまでずっと歩き通しで休憩もとっていなかったせいもあり、フィグはしばらくの間、時も忘れてその景色に浸っていた。だから、気づくのが遅れた。

「フィグ……っ！あれ……！」

後ろからやや遅れてついてきていたラウラの鋭い声にフィグがハッとして振り返ると、遙か後方の階段からポッと黒い泡が湧き出しているのが見えた。

泡は見る間に増殖し、その一段を黒く埋め尽くす。浸蝕された階段は虹色の輝きを失い、灰色の泥の塊と化してぼろぼろと崩れ去っていった。

「また ^{コシュマアル} 悪夢 か……！走れ、ラウラ！」

フィグはラウラの元へ駆け下りると、すぐにその手を取って階段を駆け上り始めた。

「ま、また、走るの……っ!？」

ラウラは既に泣きそうな顔になっていた。

これまでに相当な段数を上ってきた二人の足は、思うように動いてはくれない。そして悪夢の黒い泡は二人を追うように、階段を一段一段浸蝕しながら上へ上へと上ってくる。

「待っ……、フィグ！」

ろくに距離を稼ぐこともできぬまま、ラウラは足をもつれさせて転んでしまう。

「ラウラ……っ！」

フィグは咄嗟にその手を引き、抱き支える。階段を転げ落ちずに済んだことにほっとしたのも束の間、その時二人の行く先——これから上ろうとしていた十数段先の階段の上にもポッと黒い泡が湧き出すのが見えた。

「な……っ!？ 挟み撃ちかよ!？ 卑怯だぞ！」

言ってもどうにもならない文句を叫びながらも、フィグは必死に頭を回転させる。

（くそ……っ、どうにかこの場を切り抜けないと、このままじゃ階段を泥に変えられて谷まで真っ逆さまだ。……あの ^{コシュマアル} 悪夢 を上回る夢は何だ？ どんな ^{レマギア} 夢術 をぶつければアレを上書きできるんだ……？）

だが、どれほど頭をひねっても、有効そうなアイデアは浮かばない。その時、フィグの隣で無言で ^{コシュマアル} 悪夢 を見つめていたラウラが、おもむろに ^{シルヴァースプーンワンド} 銀の匙杖 を取り出した。

「夢より紡ぎ出されよ！日本神話より“木花之佐久夜毘売”“木花知流比賣”！」

だがその ^{レマギア} 夢術 にフィグは啞然とした。

「何やってんだ、ラウラ!？ そんな ^{レマギア} 夢術 を今紡いで一体何になるって言うんだ!？」

フィグにはラウラの ^{レマギア} 夢術 の意図がまるで理解できなかった。だがそうして問いつめ

ている間も コシュマアル 悪夢 の進攻は止まらない。上下からじわじわと近づいていた コシュマアル 悪夢 たちは、ついに二人まであと数段の所まで迫っていた。

「フィグ、私と一緒に斜面へ向かって飛び下りて」

ラウラが石と土ばかりの ユグドラシル・スタンプ 世界樹の切株 の斜面を指差し、静かに告げる。フィグは目を剥いた。

「正気か、ラウラ！あんな岩だらけの急斜面に飛び下りたら怪我だけじゃ済まないぞ！もし谷底まで転がり落ちでもしたら……」

「大丈夫！私を信じて！もう時間が無い！」

コシュマアル 悪夢 はもう目の前まで迫っていた。フィグは覚悟を決めると、ラウラの身を再び引き寄せ、あらゆる衝撃から守ろうとするかのようにその全身を自分の身で包み込んだ。そのまま階段を蹴り、斜面へと飛び下りていく。

斜めに傾きながら落下していくフィグの目に、周りを取り囲む深い谷が、そしてそれを埋める緑の森が映る……はずだった。

だが、その目に映った森の姿は、つい先刻まで目にしていたものとはまるで違っていた。フィグは思わず状況も忘れて目を見張る。

先ほど眺めた時には緑一色だったはずの森の木々は、いつの間にか鮮やかな色彩で塗り替えられていた。そしてそこから二人めがけて、色とりどりの何かが一斉に飛んでくる。まるで蝶の群れのようにも見えるそれは――おびただしい数の花びらだった。

「……花びら、だと？花が咲くような時季でもないのに、どうして急に……」

花びらは岩山の斜面に何千重、何万重にも散り重なり、分厚いクッションとなって二人の身を受けとめた。衝撃は全て花びらに吸収され、二人は痛みもなく、斜面を滑り落ちることもなく、花びらのベッドに転がった。

全身花びらまみれで宙を見上げると、そこには舞い散る花に囲まれて二つの影が浮かんでいた。その姿を見とめ、ラウラは満面の笑みで口を開く。

「ありがとう！“コノハナノサクヤヒメ木花之佐久夜毘売”“コノハナチルヒメ木花知流比賣”！」

容姿のよく似た二柱の女神はラウラの礼に微笑んで頷くと、七色の光を散らして消えた。

「コノハナノサクヤヒメ木花之佐久夜毘売とコノハナチルヒメ木花知流比賣……花の開花と落花を表すという姉妹神か。だから急に花が咲いて、その花びらがこうしてここに散ってきたのか。さっきの レマギア 夢術 は

コシュマアル 悪夢 を上書きするためのものじゃなく、落下による怪我を防ぐためのものだったんだな」

「うん。あの コシュマアル 悪夢 を上書きするアイデアがどうしても思い浮かばなかったから。

実はさっきの橋の時に思いついてただけど、さっきは使う暇が無かったんだよね」

ラウラはてへへ、と笑いながら答える。

「しかし、階段は全て泥に変えられてしまったな」

フィグは今まで階段の在った場所を眺め、溜め息をついた。虹色の階段は既に全て
コシュマアル
悪夢 に塗り替えられ、泥と化して崩落していた。ラウラは腕組みし、考え込むよう
に唸り声を上げる。

レグナリア・レヴァリム
「 夢見の女神 様に頼めばもう一度階段を出してはもらえるだろうけど、また途中で
コシュマアル
悪夢 に襲われるのがオチだし、こんなことでこれ以上、
レグナリア
女神 様の夢見の力を消耗
コシュマアル
してもらいたくはないんだよね。ただでさえ女神様の御力が足りなくて島に 悪夢 が
溢れちゃってる状況なわけだし」

「なるほどな。で、これからどうする？」

その問いにラウラは再び唸り声を上げた後、ぱっと顔を上げ明るくこう言った。

「うーん……。じゃあ、とりあえずご飯にしようか！」

「は!？」

「いっぱい歩いたり走ったりして疲れたし、お腹も空いたし、この辺で一休みしよう。
大丈夫、あそこまで大規模な
コシュマアル
悪夢 が現れたんだから、次に襲ってくるまでにはしばらく時間が空くはずだから」

「お前は……本当に、暢気と言うか、ポジティブ過ぎると言うか……」

(でも、だから救われたりもするんだよな。こいつがこんな性格だから、こんな状況でも気が滅入らずにいられる)

心の中で思ったことを口には出さず、フィグはただ呆れたような表情で
わら
微笑った。

レグナリア・レヴァリム
「ところで、お前が 夢見の女神 に届けるあるものって何なんだ？」

渡された缶詰を缶切りで開けながらフィグが問うと、ラウラはあからさまにぎくりとした表情になった。

「えっと、えっとね……それは、その……ナ、ナイショ、だよ。えっと……真の
ファイユ・レヴァリム
夢見の娘 にしか明かされない
トップ・シークレット
最重要機密 だから」

いかにも『何か隠してます』と言わんばかりのしどろもどろな返答に、フィグは目を鋭くする。

トップ・シークレット
「『 最重要機密 』ってのはつまり、一般の島民に知られちゃならないような『何か』があるってことだよな？まさか、お前の身に危険が及ぶような何かがあるんじゃない

だろうな？」

「や、やだなー。そんなことあるわけないよっ。フィグってば心配し過ぎ！」

不自然に明るく笑って誤魔化すラウラに、フィグは疑念を強める。だが、それ以上追及してもラウラが口を割らないだろうことは、幼馴染であるフィグには実際に試してみるまでもなく分かっていた。

（こいつ、変なところで頑固だからな。ま、言う気が無いならそれでもいいさ。最後まで一緒について行ってこいつを守ればいいだけのことだ）

フィグの脳裏にかつて夢の中で聞いた ^{ユエシアラオレン} 月下老人 の言葉が過ぎる。

――運命でつながれた唯一無二の相手を失ってしまうと、それはそれは深い絶望を味わうことになるでな。

胸の内で静かな決意を固めるフィグの様子には気づかず、ラウラは未だ動揺しているようにうろうろと視線を彷徨わせ続ける。その時、その視線がふとフィグの手に持つ缶に止まった。一瞬ぼーっと缶を眺めた後、ラウラは何かを閃いたようにパッとその目を見開き、グッと拳を握りしめた。

「そうだ！この手があった！」

唐突な叫びにフィグは反応しきれず、思わず缶を取り落としかける。

「な、何だ？何の話だ？」

「あそこまで登るいい方法を思いついたんだよ」

言ってラウラは ^{ユグドラシル・スタンプ} 世界樹の切株 の頂を覆い隠す分厚い雲を指差す。その視線はじっと、フィグの手に持つ豆の缶詰へと注がれていた。

「じゃあ行くよ！夢より紡ぎ出されよ！『ジャックと豆の木』より“雲まで伸びる豆の木”！」

ラウラが ^{シルヴァースプーンワンド} 銀の匙杖 を大きく振ると、その軌跡を描くように虹色の光の粒が次々と現れ、地面に吸い込まれていった。直後、土の中からひょこりと緑色の芽が顔を出す。それは凄まじいスピードで生長し、天へ向かって伸びていった。

「よ……っ、と」

茎がある程度まで太くなったところで、二人は素早く豆の木に飛びついた。そのまま両手両足でしっかりとしがみつく。あとは生長する豆の木が自然と二人を雲の高さまで押し上げてくれるはずだった。

「自分で紡いでおいて何だけど……これ、思ったより怖いね」

上昇のスピードに耐えるように必死に蔓につかまりながら、ラウラは恐怖を押し隠すように強張った笑みを浮かべていた。

「落ちるなよ、ラウラ。今は両手がふさがっていて助けられないからな」

高みの景色を眺めるような余裕も無く、^{コシュマアル}「悪夢」に妨害される間も無く、二人は気づけば雲の真下まで来ていた。

「あ、そうだフィグ。気をつけて。雲の中はきっと……」

ラウラはそこでやっと思い出したというように口を開く。だが言い終わるよりも早く、二人は雲の海へと突入していた。

密度の違う空気の層を突き破るような感覚とポフツという音とともに、視界が白一色に染まる。濃い水蒸気が体中の孔という孔からなだれ込んでくるようで、フィグは思わずきつく目を閉じていた。

それからどれだけ経ったのか、ふいにフィグの手足から豆の木の感触が消え失せた。何が起きているのか把握する間もないうちに、フィグの身体は空中に投げ出され、直後、妙にふわふわした綿のような物体の上に転がり落ちた。

「な、何だ!？」

目を開けて辺りを見渡すが、そこはほんのわずかの先も見通せぬ深い霧の中だった。地面は綿のようにもこもこしていて柔らかく、おまけに水に浮いているかのように微妙に揺れていて安定感が無い。

「まさかここはあの雲の中なのか……!? おい、ラウラ。さっき言いかけてた、雲の中がどうのっていうのは何なんだ? ここのことを言ってたのか？」

さっきまですぐそばにいたはずのラウラに、フィグは当然のように話しかける。だがいくら待ってみても答えは返らない。

「ラウラ……!？」

立ち上がり、手探りで辺りを探してみる。だが四方を探してもラウラの姿どころか気配さえも感じられない。

「ラウラ! おい、いないのか!? どこへ行ったんだ!？」

一瞬で血の気が引く。フィグは突き動かされるように走り出していた。

「ラウラ! どこにいる!? 俺の声が聞こえないのか!？」

両手で霧を掻き分けながら、走っては叫び、叫んでは走る。だがどこまで行っても白一色の世界の中、漂う霧が濃くなったり薄くなったりする程度で、景色は全く変わらない。真っ直ぐ走っているのか、そもそも先へ進んでいるのかどうかすら分からなかった。

方向感覚も時間の感覚もまるで無く、ただ闇雲に走り回り、やがてフィグは疲れ果て

てその場にへたり込んでしまった。

「くそ……っ！」

苛立って地を叩くが、その拳はふわふわした綿のような物体にやんわりと受け止められ、物を殴りつけたという感触すら得られなかった。

(このままじゃ罅が開かない。考えろ、何か方法はあるはずだ。ラウラを見つけ出す方法……)

頭を掻きむしりながら考えるが、どうしても使えそうな方法が思いつけない。

「くそ……っ、そもそも何で命綱の一本くらい結んでおかなかったんだ！」

今更どうにもならないと知りつつ過去の自分をなじって叫び——、その自分自身の叫びにフィグはハッと目を見開いた。

(命綱——二人を結ぶ ^{ロープ} 縄、か……！もしあの夢が本当なのだとしたら……)

フィグは立ち上がり、自分の足首をじっと見つめた。母に渡されたペンダントを ^{シルヴァースプーンワンド}

銀の匙杖 に変化させ、腰に下げた瓶に手をかける。

(だが、あれが本当にただの夢だったらどうする？俺の相手があいつだっていうのが、単なる俺の願望が見せた夢なのだとしたら……)

心に湧いた不安と迷いが、フィグにその先の行動を躊躇わせる。だがフィグは頭を激しく振ってそれを吹き飛ばした。

(考えても仕方のないことだろうが！今はこれしか方法が無いんだ。やってみるしかないだろう！)

フィグは改めて ^{シルヴァースプーンワンド} 銀の匙杖 を構え直すと、そこに瓶の中の ^{レネジウム} 夢雪 を振りかけ、叫んだ。

「夢より紡ぎ出されよ！『 ^{タイピンクアンチ} 太平広記 』より“ ^{ホンシエン} 紅線 ”！」

直後、白銀の光がフィグの片足に絡みつき、その足首に微妙な重さが加わった。だが光が弾けた後そこに現れたのは、いつかの夢の中でみたあの赤色の縄ではなかった。

(これは……足枷と、鎖!? どういうことだ!? ^{ホンシエン} 紅線 は赤い縄のはず……。確かにこの足枷と鎖も赤い色をしているが……)

フィグの足首には血のように鮮やかな赤色をした足枷が、がっしりとはまっていた。さらにその足枷からは、同じく赤い色をした鎖が白い地を這い遠く霧の向こうまで伸びている。

(足枷と、鎖……。これはどういう意味なんだろうな。縄より強い運命で結ばれているということか？それとも……。いや、考えたところで答えなんて分かるはずもないか。とりあえずはこれを辿っていつてみるだけだ)

フィグは地面から鎖を拾い上げ、それを手繰るようにして歩き出した。どれくらい歩いたのか分からない。数時間にも、永遠のようにも思える時間の果てに、フィグはようやく見覚えのある輪郭を霧の向こうに見出した。

「ラウラ……！」

その姿が地に横たわっているのに気づき、フィグは蒼白になって駆け寄る。抱き起こそうと肩に手をかけ……、だがすぐにフィグは脱力してその場に座り込んでしまった。

「……まったく。どこまで暢気な奴なんだ、お前は」

口では文句を言いながらも、フィグは深い安堵の息を漏らす。そんなフィグの目の前で、ラウラはふわふわした地面の上に身を丸め、安らかな寝息をたてていた。フィグはそっとその頬に触れ、あたたかな血が通っていることを確かめる。そしておもむろにその耳元に口を寄せ、たっぷりと息を吸い込んでから、叫んだ。

「ラウラ！おい、ラウラ！起きろ！いくら何でもマイペース過ぎるぞ、お前！」

「え……っ!? 何、何……っ!? 何事……っ!?」

ラウラはびくっと身体を揺らし、慌てふためいて跳ね起きた。そして寝ぼけ眼で辺りを見回した後、不思議そうにフィグを見つめる。

「ん……? あれえ? フィグ? どうしてここにいるの？」

「どうしてって、お前の方こそ、どうして思いきり寝てるんだ。こっちは必死に探し回ってたのに」

それまでの焦燥感と苦労を思うと、つつい口調が厳しくなる。そのあからさまな叱責口調にラウラは頬をふくらませた。

「私だってちゃんと探し回ってたよ。でもそのうちに歩き疲れて、少し休もうと思って横になったら、地面があまりにふかふかで気持ち良くて……その、気がついたら眠っちゃってた、みたい……？」

言いながら、さすがに自分でも悪いと思ったのか、ラウラの視線は申し訳なさそうに下へ下へと下がっていった。その目がふと、足首にはまった赤い足枷をとらえる。

「あれ……? 何、これ」

ラウラは不思議そうに赤い鎖を持ち上げる。フィグはぎくりとしたようにラウラから目を逸らした。それに呼応するように、赤い鎖と足枷も白銀の光を散らして消滅する。

「フィグが紡いだ^{レクリュスタルム} 夢晶体 だったの? 何かの神話とか伝説に由来するもの? 足と足をつなぐ鎖なんて、そんな話あったっけ？」

「えーと……それは、その……な。いわゆるアレだ。運命の赤い糸ってのは、大元のオリジナルでは小指じゃなくて足首に結ばれてるものらしいぞ。本当は鎖じゃなくて縄のはずなんだが。つまり、その……そういうことだ！」

誤魔化すように早口に説明するフィグの顔は、真っ赤に染まっていた。ラウラは初め意味が分からないというように呆けた顔をしていたが、すぐにその顔がフィグと同様真っ赤に染まる。だがそれは一瞬のことだった。すぐにその顔は思いつめたような険しいものへと変化していったが、目を逸らしたままのフィグには全く見えていなかった。

「足枷と鎖、か……。まるで、呪いみたいだね」

呟かれたその囁きはラウラにしては珍しく、暗く翳りを帯びていた。

「ラウラ？」

思わず聞き返すフィグに、ラウラはわざとのように明るい笑顔を向ける。

「ううん、何でもない。ゴメンね、説明が間に合わなかったよね。ここは“迷いの雲海”
レグナリア・レヴァリム。普通の島民が無闇に 夢見の女神 様に近づかないように創られた雲の迷宮なんだ。ただ一つだけある正しい出口に辿り着かないと、先へは進めないんだよ」

「迷宮……？これが、か？霧でよく見えないが、さっき走り回った時には何も無いだっ広い空間としか思えなかったんだが」

「でも、すぐそばにいたはずの私ともはぐれちゃったでしょ？この迷宮の霧の壁にはいくつもの ワープゲート 転送門 が仕込まれてて、知らずにくぐると全然別の場所へ転送されちゃうんだよ。だから正しい道順で行かないとダメなんだ」

言いながらラウラは前髪からヘアピンを引き抜き、シルヴァースプーンワンド 銀の匙杖 に変化させて叫んだ。

「夢より紡ぎ出されよ！ギリシャ神話より“アリアドネの糸”！」

ワンド 杖 から飛び出した虹色の光は一本の長い麻糸を束ねた糸玉へと変化し、ラウラの手の中に落ちてくる。

「“アリアドネの糸”……英雄テセウスが ラビュリントス ミノタウロスの 迷宮 を脱出する時に使った糸、か」

呟くフィグの目の前で糸はひとりでにするすると解け、道筋を示すように二人の行く先に向かって伸びていく。

レグナリア・レヴァリム 「 夢見の女神 様がアリアドネの糸を使って正しい道を教えてくれてるよ。行こう、フィグ」

「ああ。だが、その前に……」

フィグは歩き出そうとするラウラの手をとっさに捕まえ、握りしめた。

「……フィグ？」

きょとんとした顔で振り向くラウラに、フィグはそっぽを向いたまま口を開く。

「……またはぐれたら困るだろうが」

そのぶっきらぼうな物言いに、ラウラはこっそり笑った後、ぎゅっと手を握り返した

。

「うん、そうだね」

第11章 悪夢の卵

クラウド・エンド

「ここの出口は“雲の果て”って呼ばれててね、雲海の上に出るための“天使のはしご”があるんだよ」

記憶を探るように沈黙した後、ラウラは教えられた説明をそのままなぞるような口調でそう言った。

「……“天使のはしご”って言ったら普通は雲の切れ間から差し込む光のことじゃないのか？まあ、こうして雲の中を歩けてるくらいだからな。何があっても不思議じゃないか」

「うん。この島は半分そういうものでできてるからね」

「……そういうもの？半分って、どういう……」

引っかけりを覚えて聞き返そうとしたフィグだったが、その言葉はラウラの歓声によってかき消された。

「あったあ！フィグ！見てっ、天使のはしご！」

ラウラの指差す先にあるものは、白霧を切り裂くように差し込む幾筋かの光だった。金色のスポットライトのようなその光の中に足を踏み入れると、ふわりと身体が宙に浮き、上へ上へと昇っていく。

「何か、これ……天へ召されてるみたいでアレだな」

自分で想像したイメージに自分でげんなりするフィグの表情には気づかず、ラウラは満面の笑みでうなづく。

「うん！楽しいね！」

「いや、そういうんじゃないで……」

フィグは説明しようと口を開いたが、ラウラのあまりに楽しそうな顔にそのままその口を閉ざした。

「……ま、いっか」

二人の身体は白霧に包まれた空間を抜け、ふわふわした雲の大地の上にゆっくりと着地した。そこに広がる光景に、二人とも思わず言葉を失い、見惚れる。

その場所は今、ただ一つの色に染め上げられていた。見渡す限りの雲海も、雪の積もった山の頂も、二人の頭上に広がる空も、全てが沈み行く太陽の光を浴びて茜色に輝いている。

「フィグ！見て見て！雲の上のお花畑！」

ラウラがはしゃぎ声を上げて雲海の上を駆け回る。そこには雪のように白銀に輝き、タンポポの綿毛のようにふわふわと柔らかい不思議な花が群れ咲いていた。

「……この花、^{レネージュム}夢雪に似てるな」

しゃがみ込んでじっと観察し、フィグはそっとその花に触れてみる。

「うん。これは^{レネージュム}夢雪と同じものだよ。“^{レネージュ・フルーム}夢雪花”って名前で、夢雪と違って溶けないから便利なんだ。雲の上でしか育たないのが難点だけだね」

「しかし、もう夕暮か。暗くなってからの登山は危ないし、今夜はここで野宿するしかないか？」

「いいね！いいね！お花の^{ベッド}寝台に横になって、星を見ながら眠るんだね！」

「お前な、少しは不安とか緊張感とか無いのか？『寝ている間に^{コシュマアル}悪夢に襲われたらどうしよう』とか」

どこまでもポジティブなラウラの発言に、フィグはついツッコミを入れずにはいられ

なかった。

「うーん……、確か雲海が障壁バリアになってくれるから、ここまでは悪夢も上ってこれない……、っていうようなことを 夢見の女神 レグナリア・レヴァリム 様に聞いた気がするんだけど、うろ覚えだから、本当かどうか分からないな」

ラウラはいかにも自信が無いというようにうつむいて見せる。

「お前な、そういう重要なことをどうしてちゃんと記憶してないんだ」

「だって夢の中でいっぺんに説明されたんだもん。全部をちゃんと覚えきるなんて無理だよ。でも大丈夫！いざという時のために二人でかわりばんこに眠ればいいよ。ちょうど私はさっき雲海の中で一休みしてたから全然眠くないし。フィグが寝てる間はしっかり見張りしておくから！」

「一休みどころか熟睡してたじゃないか。だが、そういうことなら先に休ませてもらうことにするか。さすがに俺も疲れたしな」

文句を言いながらもフィグの手は既にてきぱきと野営の準備を進めている。雲の上だということに山から吹き下ろす風は春のようにあたたかく、肌寒さを感じない。野外調理で作った夕飯を不味いだの美味しいだの言いながら二人でつつき、花の海に横になって柔らかな風に頬を撫でられるうちに、フィグの頭に常に居座っていた緊張感はとろとろと溶け出していった。代わりに昼の間の疲れがどっと襲ってきてまぶたを重くする。

「……いいか、ラウラ。何かあったらすぐに俺を起こすんだぞ。自分一人で解決しようとか思うなよ。絶対に……」

眠りに落ちる直前、フィグはラウラにそう念押しした。

「うん。分かってるから、大丈夫だよ」

返ってきた声はどこかラウラらしくなく硬いものだったが、それに疑問を覚えるよりも先に、疲労感と眠気が波のようにひたひたと押し寄せてきた。暴力的なまでに抗いがたく、それでいて全身を真綿マキマキでくるまれていくかのようにふわふわと心地良いその感覚に、フィグは逆らうこともできず眠りに堕ちていく。その姿をすぐそばでラウラが、思いつめたような顔で見守っていることも知らずに……。

「……フィグ、もう寝ちゃった？」

蜘蛛の巣状にひび割れた星空の下、花園に横たわり目を閉じたフィグに、ラウラはそっと問いかける。答えは返らない。聞こえるのは花々が風に揺れる、さわさわという音だけだった。

ラウラはそれでもしばらくフィグの返答を待つ。そしてフィグが本当に眠ってしまったのだとようやく納得できたところで、再び唇を開いた。

「ごめんね。うろ覚えだなんて嘘だよ。ここには ゴシュマアル 悪夢 は出ない。だから安心して眠ってて」

言いながら、ラウラはおもむろに髪留めを引き抜き、シルヴァースプーンワンド 銀の匙杖 へと変化させる。

「夢より紡ぎ出されよ……え……」

フィグを起こさぬよう静かに静かに言葉を紡ぎ、だがラウラはすぐに声を詰まらせる。

。 気を取り直してもう一度口を開こうとしたその時、ラウラの瞼からぽたりと涙が零れた。

「……………あっ……………」

ラウラはとっさに口をふさいだ。涙とともに零れそうになる嗚咽を、必死にこらえる。そして シルヴァースプーンワンド 銀の匙杖 を握り直すと、か細く声を震わせながら、やっとのことと言葉を発した。

「夢より……紡ぎ、出されよ……縁切りの……神様“宇治の橋姫”……っ」

ワンド 杖 の先から七色の光が溢れ出し、その中から一柱の女神が現れる。一見しとやかな姫君のように見えるその女神に、ラウラは泣きながら懇願した。

「橋姫」、お願い。私とフィグの間に結ばれた縁を……運命の糸を、断ち切って」

橋姫はうなずき、ラウラの足元にすっと身を屈める。そこから何かをすくい取るような動作をして立ち上がった橋姫の手には、雲海の中で見たあの赤い鎖が握られていた。

橋姫は両手で鎖を掴み、力任せに引き千切ろうとする。だが、鎖は切れない。どころか、疵一つさえつくことがなかった。

『さてもまあ、強き縁に結ばれしものよ。あな口惜しや、妬ましや』

橋姫の赤い唇から、独り言とも恨み言ともつかぬものが零れだす。やがてその姿は徐々に別のものへと変貌していった。

長くつややかだった黒髪は荒々しくくねって角のように逆立ち、全身は朱の色に染まり、頭には 丑の刻参り の扮装のような三つの火を点した鉄輪が現れる。

たおやかな美女から嫉妬深い鬼女へと変化した橋姫は、般若の形相で鎖を左右へと引っ張る。

赤い鎖はそれでもしばらくは橋姫の力に耐えていた。しかしそのうちにぴし、と音が鳴り、ついに鎖の輪の一つに小さく亀裂が入った。橋姫はその顔に一瞬喜色を浮かべ、さらに力を込めようと鎖を握り直す。だがその時、ふいに鎖が激しく波打って揺れた。フィグが飛び起きたのだ。

「何だ!? コシュマアル 悪夢 が現れたのか!？」

フィグは橋姫の姿を見ると、とっさに ワンド 杖 を構えた。

「その姿……“宇治の橋姫”か? だったら……、夢より紡ぎ出されよ! 『へいけものがたり 平家物語・剣の巻』より名刀“髭切”!」

フィグは叫びながら、地に咲く花々を撫でるように シルヴァースプーンワンド 銀の匙杖 を動かす。

レネージュ・ブルーム 夢雪花 の白い綿毛は一瞬で白銀の光となって弾け、フィグの スプーンワンド 匙杖 はその光の中で一振りの日本刀へと形を変えていた。その刀を目にした途端、橋姫の顔色が変わる。

『それは……、その刀は……!』

橋姫は片腕を押さえ、身を震わせる。

『いやじゃ……。この腕を斬り落とされるのは、もういやじゃ……。!』

もうこの場所にはいたくない、とでも言いたげな声を発しながら、その身体が七色に光り輝き、徐々に霞んでいく。やがて橋姫の姿は空気に溶けるようにして消え去り、後には宙を舞う七色の光の粒だけが残された。

フィグはしばらく無言でその光を見つめていたが、やがて振り返ってラウラを見た。その顔からは一切の表情が失われていた。

「……………どういふことだ、ラウラ。 コシュマアル 悪夢 ならば黒い泡を出すはずだよな? なのに、これは レクリュスタルム 夢晶体 特有の光を発して消えた。しかも真の フィーユ・レヴァリム 夢見の娘 にしか出せないという七色の光を出して」

ラウラは目に涙を浮かべたまま、びくりと肩を揺らす。

「ごめんなさい。ごめんなさい……っ」

「答えになってない。俺は理由を訊いてるんだ。なぜこんなものを出した？何をするつもりだったんだ？お前は」

全く表情のない顔で、だがフィグが深く静かに怒っていることにラウラははっきりと気づいていた。謝罪だけは口にしながら、しかしそれでもラウラは、己の為そうとしていたことを否定する気はなかった。どれほど怒りを買っても、たとえフィグに許してもらえなかったとしても、それでもどうしても譲れないものが、ラウラにはあった。

「ごめんなさい。でも、ダメなんだよ。フィグの運命の糸は、私につながったままじゃダメだから。もっと違う、他の誰かと結ばれなくちゃ……」

「何なんだ、それは。お前、俺のことが嫌になったのか？」

「そんなわけない！どんなに離れ離れになっちゃったとしても、フィグに対する想いだけは絶対に変わらないって、私、自信を持って言えるもん！でも、だからこそ私、フィグには幸せになってもらいたい。フィグのことが……好きだから」

混乱のあまりうっかり口にしてしまった前回の告白とは異なり、その言葉をラウラは自分の意思で、絞り出すように口にした。フィグはさすがに目を見開いてラウラを見つめる。

「このまま私とつながっていたら、フィグ、この先不幸になっちゃう。そんなの、見たくないよ。せめてフィグには幸せでいてもらいたい。だから……」

「何なんだ、それ。俺の幸せを何でお前が勝手に決めるんだ！？幸せか不幸かなんて、そんなのは俺の気持ち次第だろう！そんな勝手な決めつけで一方的にこの“糸”を切られてたまるか。だいたい、どうして俺がお前といると不幸になるって言うんだ？」

その問いに、ラウラはすぐには答えられなかった。ラウラは シルヴァースプーンワンド 銀の匙杖 をぎゅっと握りしめ、硬い声で告げる。

「だって……もうすぐ私は、フィグの前からいなくなってしまうから」

フィグは凍りついたように動きを止めた。その手から滑り落ちた日本刀が白銀の光をまき散らしながら ワンド 杖 の形に戻り、音を立てて花の海に沈む。

「……嘘、だろ？それじゃお前が届けるあるものってというのは、やっぱりお前自身のことなのか？お前が生贄として レグナリア・レヴァリム 夢見の女神 に身を捧げるってことなのか？」

ラウラはしばしの沈黙の後、ゆっくりと首を振る。

「ううん。それはちょっと違うかな」

「何が違う！？いや、何だっていい。お前がいなくなると言うなら、女神の元へなんか行かせない！」

「……そういう反応されると思った」

ラウラは小さく苦笑すると、握っていた シルヴァースプーンワンド 銀の匙杖 を素早く振り上げた。

「夢より紡ぎ出されよ！『眠れる森の美女』より“呪いのいばら”！」

「しまっ……た……！」

身構える間もなく、フィグの身にいばらの蔓が巻きつく。フィグは身体を自由を奪われ、なす術もなく花園に倒れ込んだ。綿毛が飛び散り髪や頬にかかる。動けないフィグの代わりにラウラがそばにしゃがみ込み、細い指で綿毛を払った。

「ごめんね。でもいばらの棘が出ないように念じておいたから、痛くはないよね？全てが終わったら解けるようにしておくから、しばらく我慢してね」

「ばか！行くな、ラウラ！」

フィグは蔓を解こうと必死にもがくが、もがけばもがくほど蔓が四肢に絡まり、動けなくなっていく。ラウラは哀しく微笑んだ。

「何だか可笑しいね。いつか置いていかれるとしたら、私の方だと思ってたのに……」

名残りを惜しむようにフィグの顔をじっと見つめ、ラウラは静かに立ち上がった。

「本当にごめんね。本当は私一人で来なきゃいけないのに、どうしても、もう少しだけフィグと一緒にいたくて、ついて来てもらっちゃった。大変な目にいっぱい遭わせちゃったね。でも、嬉しかったよ。最後にまたフィグと一緒に冒険ができて」

「行くな、ラウラ！行くな！」

フィグにできたのは、そうやって制止の言葉を叫ぶことだけだった。それでラウラが考えを改めることはないと分かっている、そうすることしかできなかった。

「ごめんね。私のことは忘れていいから。私との“赤い糸”はいつでも断ち切って、新しい運命の相手を見つけて、幸せになってくれていいから……」

それ以上は涙で言うことができず、ラウラはフィグから逃れようとでもするように背を向けて走り出した。

「ラウラ！！」

一度も振り返らないその後ろ姿は、花園の果ての白い森に隠れて消える。そしてフィグの意識はいばらの呪いに蝕まれ、再び深い眠りへと堕ちていった。

どれほどの時間が経ったのかも分からない、夢も見ないような深い眠りの後、フィグはふいに目を覚ました。

その耳に聞こえてくるのは、花を踏みしめて歩み寄ってくる静かな足音。驚いて視線を向けると、そこには白い シスター・ローラ 尼僧衣 をまとった一人の女の姿があった。

「あんたは……レグナスコラ 小女神宮のシスターか？どうしてこんな所に？」

シスターは体重を感じさせないふわふわした足取りで近づいてくると、フィグの傍らに膝をつき、じっとその目をのぞき込んだ。

「夏風岬のフィグ・フィーガ、あなたに問いたいことがあります」

「……問う？一体、何をだ？」

「これから後、ただ一度だけ、あなたの真の夢を叶えられる瞬間がやって来ます。あなたにはその夢を追う覚悟がありますか？あなたにその覚悟があると言うなら、手を貸しましょう」

「夢を追う覚悟……？何を言ってるんだ、あんた。今はそんな場合じゃない！ラウラを追わないと！」

いばらの絡みついた身体で無理矢理立ち上がろうとするフィグを押しとどめ、シスターは静かに唇を開く。

「ラウラ・フラウラは彼女自身の意思で己の未来を選択し、既に決断を下しています。それを覆すことは、もはや誰にもできません。そして私にできることは、誰かの胸に夢を育てること。そして、その夢の実現にほんの少し力を貸すことだけです」

「何を言ってるんだ？あんた、一体何者だ!？」

「私の名はフレア・フリーズ」

短く答え、彼女はフィグの全身に絡みつくいばらの蔓をそっと手のひらで撫でた。途端いばらは七色の光の粒となって宙に舞い上がり、消滅する。フィグは呆然とフレアを見上げる。

「この島は、夢と現の混じり合う島。ですから想うだけで叶うこともあれば、どれほど努力しても叶わぬこともあります。あなたの夢は後者。理に阻まれ叶えることのできぬ

夢なのです。本来であれば……」

「……フレア・フリーズだと……？その名は……。あんた、まさか……」

フィグはフレアの話も耳に入らず、驚愕の表情でその名を繰り返す。

「^{レヴァリムどう}夢見島の住民は皆、私の子ども同然の存在。できることならば全ての島民に自分の夢を叶えて欲しいと願っています。夢破れ傷つく姿を見るのは、自分のことのように悲しくてなりません。それは、あなたに対しても同じこと」

言って、フレアはひどく真剣な眼差しで真っ直ぐにフィグを見つめてきた。

「あなたは今、千載一遇の^{チャンス}機会に巡り合わせました。今までこの島の数多の若者が追いかけて、けれど叶わず破れてきた夢を、あなたならば実らせることができるかもしれません。いいえ、是非とも実現させて欲しいのです。彼らの夢を無駄にしないためにも」

「俺の夢なんか今はどうでもいい！ラウラを止めてくれ！あんたならできるだろう！？
だって、あんたは……」

フレアは首を横に振ることでその言葉を遮った。代わりに未だ地に伏すフィグへ向け手を差し伸べる。

「おいでなさい。全ての結末を見届けさせてあげましょう。我々にはもう、見守ることしかできませんが」

後から後から溢れ出す涙を手で拭いながら、ラウラはひとり、道に行く。

雲上の花園“^{レネージュ・ブルーム・ガーデン} 夢雪花の園 ”の先には、白く輝く“氷樹の森”が続く。クリスタル^{レネージュム}ガラスで造られたクリスマス・ツリーのようなその森を抜けると、白銀の^{ユグドラシル・スタンプ}夢雪に覆われた世界樹の切株の頂が姿を現す。

頂へと向かう急勾配の斜面には、いつの間にかラウラを導くように一筋の道が刻まれていた。山頂へ向かいくねくねと蛇行するその道は、まるでそこだけ春になったかのように雪が融け、若草が^{シルヴァースプーンワンド}萌え出し、ところどころにタンポポが可憐な花を咲かせている。

ラウラはその道を^{レグナリア・レヴァリム}銀の匙杖をつきながら登る。雪に覆われていない道とは言え、ただでさえ急峻な山道だ。だが、ラウラは疲れを感じなかった。それどころか、それまでに溜まっていたはずの疲れさえもが消えていく。緑の道を一步踏みしめるたびに、不思議なぬくもりがじわじわと足元から登ってくる。まるで足の裏を通して山そのものから癒やしの力をもらっているようだった。

「…… 夢見の女神 様。今も私を見守って、助けてくれてるんだね。待ってて。今行くから」

ラウラは小さく呟くと、歩く速度を速めた。藍色だった夜空はやがて漆黒に変わり、頂上へ辿り着く頃には東の方からゆっくりと朝の光が差し込み始めていた。

「着いた。ここが…… ^{レヴァリム} 夢見 島の中枢……」

頂に立ち、ラウラは ^{ユグドラシル・スタンプ} 世界樹の切株 の内部を見下ろす。

普通の火山であれば火口があるべきその場所には、まるで何かで抉られたかのように深く巨大な縦穴が開いていた。 ^{ユグドラシル・スタンプ} 世界樹の切株 と呼ばれるこの岩山は、あたかも樹木の内部が腐り^{レグナリア・レヴァリム}虚となったかのごとく内部が空洞となっていたのだ。

その深い穴の底には、内側からほのかな光を放つエメラルドグリーン^{うみ}の湖がある。

夢見 島の中枢“母なる眠りの羊水”だ。

温水の湖であるらしく、水面からは淡い水煙が立ち昇っていた。そしてその湖の中心に、水に沈む花のようにゆるやかに揺らめくものがある。よく目を凝らせばそれが、ソメイヨシノの花のような色のドレスに身を包んだ一人の女性が、胸に大きな黒い卵のようなものを抱き、水の中で胎児のように身を丸めているのだということが分かった。

。 ^{レグナリア・レヴァリム} 「……来たよ。 夢見の女神 様」

ラウラはその人影に向け、囁くように呼びかけた。

すると、それに応えるかのようにラウラの目の前に虹色の石の板が現れた。

^{ユグドラシル・スタンプ} 世界樹の切株 を登る時に現れた階段と同じ、蛋白石でできた石の板だ。ラウラが足を乗せると、それはまるでエスカレーターが下りていくように、山の内側の岩壁に沿って螺旋状に下降していった。ラウラは緊張した面持ちで縦穴の底に降り立ち、湖のほとりへと向かっていく。

^{レグナリア・レヴァリム} 「 夢見の女神 様。 ^{フィーユ・レヴァリム} 夢見の娘 ラウラ・フラウラが、あなたの夢に導かれて参りました。どうか御姿を現してください」

湖へ向け小女神宮で教わった通りの口上を述べると、それに応えるかのように湖水の中から声が響いた。

「よく来たわね、ラウラ・フラウラ。待っていたわ。……でも、今さらそんな風に畏まらなくていいのよ」

それは“女神”というイメージにはあまりそぐわない、ごくごく普通の明るい少女の声

のように聞こえた。

声があると同時に水面が盛り上がり、水底から淡い桜色のドレスをまとった人物が浮かび上がってくる。湖上に全身を現したその人は、ラウラのよく知る人物の面影をその顔に宿していた。

だが、その髪はかかとを遥かに超すほどに長く、その背丈はラウラの知る人物の胸の高さまでしかない。年格好はちょうどラウラと同じか、それより一、二才幼いように見えた。

「あなたが…… レグナリア・レヴァリム 夢見の女神 様……？」

ラウラの驚いた表情に、女神は苦笑して頷く。

「ええ。これが私の本当の姿。……がっかりさせてしまったかしら？」

ラウラはあわてて首を横に振る。

「ううん！ その姿もとても素敵です！ ……なんだか、ちょっと安心しました。シスター・フ……あ、いえ、 レグナリア・レヴァリム 夢見の女神 様も、私とそんなに変わらないんだなって」

「いいえ。変わらなくなんてないわ。あなたは私なんかとは違うもの」

女神は言いながら、ぱちんと指を鳴らした。湖の上に七色の光が走り、女神とラウラの間に睡蓮の葉でできた道が結ばれる。

ラウラはその上を渡り、女神の目の前まで歩を進めた。女神はしばらく無言でラウラの目を見つめた後、苦しげに顔を伏せた。

「……ごめんなさい。あなたを選ばないという選択肢も、私にはあったわ。もう少し頑張れば、あと何十年かは ゴジュマアル 悪夢 に耐えられたと思うから……。でも、この先たとえ何十年待ったとしても、あなたのような小女神には二度と出会えないと思ったの。だから……あなたの恋も夢も、何もかも奪ってしまうと知りながら、こうしてここへ呼び寄せてしまった」

ラウラは静かに首を振る。

「でも、それは仕方のないことなんでしょう？ レグナリア・レヴァリム 夢見の女神 様にもどうにもできない、この世の理なんですよ？」

女神は涙に潤む瞳で微笑む。

「フレア、でいいわ。フレア・フレーズ。それが私のかつての名前」

「フレア……フレーズ……」

名だけは知っていた、けれど姓までは知らされていなかったその名前をラウラは口の中で転がすように繰り返した。

「あなたのシンボルは苺よね？ 私のシンボルも苺だったの。あなたのはちょっと違って、ハートと苺の組み合わせだったけれど。……だからかしら。あなたには初めから親近感を持っていたの」

言われて、ラウラは前髪に留まった苺の髪留めに思わず手をやる。そして同時に思い出した。小女神宮でたびたび自分を慰めてくれたシスターの前髪に留まっていた、苺とハートを組み合わせた形のヘアピンを。

「初めて会った頃には、あなたを選ぼうなんて思っていなかったわ。だからあなたの恋を手助けするようなこともした。……結果的に、あなたにはひどいことをしてしまったと思っているわ。こうして悲しい別れをするくらいなら、あの時あのまま抜け道なんて知らず、幼い恋の思い出だけを抱いて生きていた方が幸せだったかも知れないわよね……」

その言葉にラウラは激しく首を横に振る。

「そんなことはありません！ フィグと一緒にいたから頑張れたことがたくさんあるから！

ここまで向かう旅だって、ひとりきりだったらくじけちゃったたかも知れない。だから、私は感謝してます。あなたが私にしてくれたこと」

「……やっぱり、あなたは私とは違うわ。私なんかよりずっと強い」

言って、フレアは空を仰いだ。何かを惜しむようにじっと見つめた後、深く息を吸い込み、再びラウラに向き直る。

「あなたなら、きっと大丈夫。安心してこの役目を任せられるわ」

フレアは微笑み、それまで大事に腕に抱えていたものをラウラへ向け差し出した。

それは硝子のように透明な殻を持つ、大きな卵だった。中では悪夢の黒い泡が、生まれては消え、消えては生まれ、絶えず生滅を繰り返している。

「分かっているわね？これを受け取れば、あなたは……」

フレアの問いに、ラウラは大きくうなずいた。

「分かっています。私は大丈夫です。それよりあなたは？あなたはこれで、本当にいいんですか？」

逆に問い返され、フレアは苦笑した。

「本当に優しい子ね、あなたは。こんな時にまで他人の心配をして。私なら大丈夫よ。選んだのがあなたで、本当に良かったわ」

フレアという言葉にラウラはきゅっと顔を引き締めた。そしてその指を、そっと卵へ向け伸ばす。だが……

「待て、ラウラ！それに触るなっ！」

突然響いた声にラウラはハッと顔を上げた。見ると山の頂、岩壁の淵に二人の人物の姿があった。

「フィグ……!?それに……、シスター・フリーズ？」

ラウラはぎょっとしてフレアを振り返る。振り返った先には、頂に立つシスター・フリーズをいくらか幼くしたような女神の姿が、変わらずにそこにあった。困惑したように二人の姿を見比べるラウラの前で、フレアが口を開く。

「おかえりなさい、私の分身。大人になれない私の夢見た、もう一人の私」

シスター・フリーズの身体が七色の光に滲む。その姿は砂が崩れるようにサラサラと風に散り、後に残った七色の光はフレアの身に吸い込まれるように消えた。

「…… 夢晶体 」

つぶやくラウラにうなずいてみせ、フレアは優しく微笑んだ。

「そうよ。彼女は私の紡いだ幻影。でも、夢晶体には変わらないけれど、私は彼女を通してずっとあなたを見てきたわ」

「フレア……様」

「ただのフレア、でいいわ。“様”は要らない。あなたはもう、私に敬語を使う必要なんてないのだもの」

悪夢の詰まった卵を、フレアは改めてラウラに差し出す。

「さあ、早く受け取って。邪魔が入る前に……」

フィグの方をちらりと見て、フレアがラウラを促す。ラウラはうなずき、再び卵へと手を伸ばす。だがフィグはそれを黙って見過ごしたりはしなかった。

「やめろーっ！」

フィグは自分の両腕に腰の小瓶に詰まった夢雪を振りかけると、そのまま湖へ向け岩壁を飛び下りた。

「夢より紡ぎ出されよ！ギリシャ神話より“イカロスの翼”！」

白銀の光が輝き、フィグの両腕に口ウで固められた鳥の羽根が出現した。フィグはそ

の翼を使い、落下速度を適度に緩めながら一直線に湖のほとりへと向かっていく。

地に降り立つと、両腕の翼は光の粒となって消え去った。フィグはそのまま湖に浮かぶ睡蓮の葉の道を駆ける。そして呆然としているラウラの身を押し退け、同じく呆気に取られ立ち尽くしているフレアの腕から強引に ^{コシュマアル} 悪夢 の卵を奪い取った。

「何ということをして！それが何か分かっているの!？」

我に返ったフレアの鋭い叫びに、フィグは思いつめたような顔で振り返る。

「分かっているわけないだろう。だが、これを受け取ればラウラが消えてしまうとか、そういう類のものなんだってことは見当がつくさ。そんなこと、させてたまるか。こんなもの……！」

フィグは湖上の道を走って引き返すと、硬い岩盤でできた地へ向け卵を持った両腕を高く掲げ上げた。

「ダメっ！フィグ！その卵の中にあるのは、ただの ^{コシュマアル} 悪夢 じゃない……！」

ラウラの制止も間に合わず、卵は地に叩きつけられる。透明な殻は音を立てて砕け散り、中から黒い泡が一気に膨張して溢れ出す。そしてそれはその場にいるフィグの身を瞬く間に呑み込んだ。

「フィグっ!!」

ラウラは顔面蒼白になって名を呼ぶ。

黒い泡は一瞬でフィグの全身を覆い尽くした後、その身に吸収されるように消えた。フィグは立っていることができず、がくりと膝をついた。その瞳はうつろで、焦点が定まっていな。そしてその肩や手足からは、時折ゆらりと黒い泡が立ち上る。

「……何なんだ、これは……」

その目は今も見開かれたままのはずなのに、フィグの脳内には瞳に映っているはずの光景は何一つ映し出されていなかった。その脳裏に映るのは、それまでにフィグが見たこともない凄惨な光景。一面の炎の海、血にまみれて横たわる人間、濁流に呑み込まれた家々、やせ細り骨と皮ばかりになった子ども——地獄と見紛うような光景が、スライドを切り替えるように次々と頭の中に映し出されては消えていく。

それだけではなかった。移り変わる光景と同時に、誰のものとも知れぬ感情がフィグの胸になだれ込んでくる。今すぐに泣きわめき出したいような悲しみや苦しみ、平静でいるのが難しいほどの怒りや憎しみ、恐ろしいほどの虚脱感にも似た絶望……。

堪えきれぬほどの激しい感情に心をなぶられ、フィグはただ己の身を抱きしめ、小刻みに身体を震わせることしかできなかった。

（これは……記憶、なのか？これまで世界のどこかで起きてきた、ありとあらゆる悲しみ、苦しみ……。その中で誰かが見て、感じてきたものの……記憶……？）

目をつぶりたくなるような光景を否応なしに見せられながら、かろうじてそれだけは、何となく理解できた。だが人間の心の限界を超えるような激しい感情の渦の中で、フィグのちっぽけな ^{ところ} 精神は今にも呑み込まれて消えてしまいそうだった。

「何なんだ、これ。何でこんな酷いことばかり起きるんだ？ただ生きるっていうそれだけのことが、何でこんなに難しいんだ……？」

脳内に映し出される光景は、大規模な災厄ばかりではなかった。家族間の諍い、友人の裏切り、愛するものの喪失——途方もない歴史の積み重ねの中で生まれては消えていく、誰の身にも起こり得る、けれどその人にとっては死よりも辛いものとなり得る苦悩——そんな記憶も含まれていた。

自分の身にもいつ起こるとも知れぬ人生の挫折や苦悩を繰り返し繰り返し見せつけられ、フィグの心は不安と絶望に塗りつぶされていく。それに呼応するかのよう、そ

の全身から立ち上る黒い泡もその勢いを増していた。

「何でこんなに苦しいのに、生き続けなきゃいけないんだ……？誰か、助けてくれ……。いや、いい。どうせ救いなんてあるはずない。もう希望なんてどこにも無いんだ。もう、どうなってもいい。楽になりたい……」

フィグの意識は今や、^{ゴジュマアル}悪夢 によってもたらされる過酷な記憶や激しい負の感情の数々と半ば同化してしまっていた。フィグは何もかもを投げ出すようにその場に倒れ伏そうとする。だがその時、その肩を、優しい手がふわりと支えた。

「そうだね……。苦しいね。辛いね。こんなに毎日、頑張っているのにね……」

黒い泡の湧き出るフィグの肩に躊躇いなく触れながら、^{ゴジュマアル}ラウラは優しく囁きかける。その目はフィグと、その身の内を暴れまわる 悪夢 ——その中に秘められた途方もない悲しみや苦しみを、真っ直ぐに見つめていた。

「私にはあなたたちを助けてあげられる力はないよ。その苦しい状況を、救ってあげられるわけじゃないよ。でも、その悲しみや苦しみを預かることならできるよ」

ラウラは赤子をあやす母のように優しく、フィグの背を撫でる。

「私がみんな受けとめるから、その胸の中に抱えてるもの、全部吐き出して。痛くて辛い記憶や気持ちは全部私に預けて。その心を解放してあげて」

その声は、まるで子守唄のように優しい響き^{ゆめ}をしていた。

「今だけは、全て忘れていいんだよ。優しい希望^{むかし}を見せてあげる。楽しかった過去を思い出させてあげる。だからその中で心を癒やして、生きるための力を取り戻して。明日また、一日を乗り越え^{ゴジュマアル}られるように……」

ラウラはそうして 悪夢 の黒い泡ごとフィグの身を抱きしめた。心から愛おしげに微笑んで。

「そのために、私はこれから生きていくんだ。……そのために、私はここまで来たん

だよ。――“^{レツナツア・レツアツム} 夢見の女神”になるために」

断章 忘れられた創世神話Ⅱ

噛みしめるように少女の願いを頭の中で巡らせた後、“彼”は静かに告げた。

「では、お前たちに“世界”をもう一つ贈ろう」

その言葉の意味を、少女はすぐには理解できなかつた。

「もう一つの世界？それは一体どのような世界なのですか？」

「理に縛られたこの世界とは異なり、無限の自由が得られる世界だ。物理法則にも肉体の限界に縛られることなく、過去と未来ですら混在する。強く思い描けばどのようなことでも叶う世界だ。お前たちを、一日のうちの何時間か、その世界へ行って過ごせるようにしてやろう」

「ああ……何と素晴らしい……。そのような世界に行くことができるのであれば、どれほど皆、心癒やされ、救われることでしょう……」

少女はうっとりとして、感謝の言葉を口にしようとした。だが“彼”は首を振り、それを押し止めた。

「強く思い描けば叶う」ということは、悪い想像イメージでさえ、強く思えば形になってしまうということだ。人間は、良い想像イメージばかりを常に頭に思い浮かべていられるような簡単な生物ではない。日々の生活の中で受けた心の傷トラウマや不安は無意識のうちに負マイナスの想像イメージを育て、やがてはその新たな世界すら蝕んでいくであろう。それは下手をすると今のこの世界よりずっとひどい地獄と化すであろうな」

「そんな……。それではあんまりです。どうか、その世界では人間の頭に悪い想像イメージが浮かばぬようにしてはいただけませんか？」

「……それはできぬ。負マイナスの想像イメージにも存在する意味があるからだ。未来への不安を失くしてしまえば、人間はそれを変えようと努力することをやめてしまう。それは人類の存続すら危うくする重大な損失だ」

「けれど……そのような悪い想像イメージに溢れた世界では、新たに世界を創造していただく意味がありません」

「そうだ。だから私はその世界に、一人の管理者を置こうと思う」

「管理者、ですか？」

「そうだ。人々の心より生み出される悪い想像イメージや負マイナスの感情を受け入れ、浄化し、絶望を希望に塗り替える者だ。――それを、人類のうちより一人……そうだな、できれば穢れを知らぬ無垢なる者のうち、子を慈しむ母のように他者を慈しむ心を持つ者、絶望の中にあっても屈することなく希望の道を探し求められる者を選び出し、その任に据えよう」

そう言い“彼”はじっと少女を見つめた。その眼差しに、少女は“彼”の言わんとすることを悟り青ざめる。

「お待ちください！まさか、私がそうだとでもおっしゃるのですか？私は到底そのような器ではありません！」

「……いいや。お前は世界の絶望を知りながら、そこから希望を見出そうと、その術を私に願った。それも自分だけが救われる術ではなく、この世界の全ての人間が救われる術を求めて……。お前よりふさわしき者は、今この世界には存在しない」

「ですが……そのような大任、人間の身には余ります！どうかもっとふさわしい管理

者を、あなたの手で一から創造しては頂けませんか？」

少女は必死に訴える。だが“彼”は首を横に振った。

「それはできぬ。我が手で人間ならぬものを創り、その世界を統べる者として据えたところで、救いにはならぬ。なぜなら人類より上の立場の者には、人類を憐れむことはできても、その悲しみ、苦しみを真に理解することはできないからだ。同じ人間として同じ悲しみや苦しみを味わってこそ、それを癒やし、慰めることができるのだ」

だが、少女はなおも訴え続ける。

「ですが、人間の身で他人の――それも、世界中の人間の絶望を癒やしていくなど、とても耐えきれるとは思えません。たとえどのような強固な精神力を持っていたとしても、いずれは絶望に蝕まれ、心を狂わせてしまうことでしょう」

「分かっている。だから何も永久にその役目を続けよとは言わぬ。限界だと思ったならば、再び人類のうちより新たな管理者を選び、その任を替わるが良い」

少女は思いつめたような表情で黙り込んだ。長い沈黙の後、か細い声で少女は訊いた。

「……私の“希望”は、どうなりますか？人類全ての絶望を希望に塗り替えられるとして、それを引き継ぐ“管理者”には、何か希望があるのですか？」

少女のひたむきな眼差しを“彼”は真っ向から受けとめた。

「希望になるかどうかは分からぬが、管理者には“島”を一つ与えよう。この世界と新たな世界との間、そのどちらでもあり、どちらでもない場所に、管理者の望みを形とした美しき箱庭を」

「箱庭の島……ですか？」

「ああ。ただ眺めるだけでも、己の分身を創りそこに住まわせても良い。寂しくなったならその島に、この世界で居場所を失くした人間たちを導き寄せ、住人としても良い。君はそこで女神として崇められ、島の行く末を見守り続けることになる。……君の失う本来の人生の代わりにはならぬだろうが、せめてもの慰めにはなるだろう」

少女はしばらく無言でうつむき、一滴だけ涙を零した。

「分かりました。その役目、お引き受け致します」

そうやってようやく顔を上げた少女の顔には、覚悟を決めたような微笑みがあった。

「……それで、我々はこれから、その新たな世界を何と呼べばよろしいのでしょうか？」

少女の微笑みを見つめ“彼”は巖かに告げる。その“世界”の名を。

「“夢”と呼ぶが良い」

「“夢”――。未来への願いや理想……“希望”と同じ意味を持つ名ですね」

「ああ。その名がふさわしかろう。そこは何ものであっても実体を持つことのできぬ世界。しかし、それゆえに何ものにも縛られず、無限の自由が得られる世界。眠りの間に肉体から離れ出た魂だけが行き来することのできる世界。そして……現の世界で傷ついた魂が、その中で癒やされ、生きる希望を取り戻すための世界なのだから……」

第12章 夢路の果て

ラウラの腕の中で、フィグの身体の震えは少しずつ治まっていった。

やがてその身からこぼこぼと黒い泡が湧き出し、一箇所に集まっていく。それと同時に割れて散らばっていた殻の破片もその黒い泡を取り囲むように集まり、元の卵の形へと戻っていった。

落ち着きを取り戻したフィグはおそろおそろ顔を上げる。そして、そこに在ったラウラの姿に目を見張った。

「……ラウラ、お前……その姿……」

フィグは思わずラウラから身を離し、その姿をしげしげとながめる。ラウラはそんなフィグの視線に気づき、両手でスカートの端をつまんでくるりと一回転して見せた。

苺の花びらのように真っ白なドレスの裾がふわりと広がる。そのウエストにはベルトの代わりにのように苺の蔓と果実を模した装身具が巻きつけられ、腕や首元にも同じ形の腕飾りと首飾りが揺れている。そして髪には同じく苺をモチーフとした宝冠が輝いていた。

「夢見の女神 になったのに、今までと同じ姿のままじゃ、カッコつかないでしよう？」

そう言って微笑むラウラの顔は、どこか寂しげに見えた。

「お前が 夢見の女神 !? どういうことだ !?」

「言葉の通りよ。ラウラ・フラウラは新しい 夢見の女神 となった。役目を終える私の代わりに、ね」

フィグの疑問に答えを返したのは、湖の中央から歩み寄ってきたフレアだった。

「ラウラが選ばれた“ 夢見の娘 ”というのはね、本来は次の“ 夢見の女神 ”となるべく選ばれた小女神のことを言うの。 夢見の女神 は数百年に一度、代替わりするのよ。 夢見の女神 の役目は過酷だから、何百年も経つうちに、自らも 悪夢 がもたらす絶望に汚染され、夢見る力を失ってしまうことが多いの。だから女神は、自らが 悪夢 を抑えきれなくなってしまったことを悟ると、島にいる小女神の中から後継者を選び出して自らの元へ呼び寄せるの。もう何代にも渡り続けられてきたことよ」

岸に辿り着いたフレアの姿は、淡い光を帯びてうっすらと透け始めていた。

「何だと……？ じゃあ、あんたも……？」

「ええ。私も元は小女神であり、 夢見の娘 だった。小女神たちを隔離し教育している“小女神宮”っていう施設はね、本当は 夢見の女神 の後継者を育てるための育成機関なの。小女神たちを無闇に恐がらせないために、真実は伏せられているのだけど……」

言って、フレアは小女神宮のある方角へ顔を向け、懐かしむように目を細めた。

「 夢見の女神 の後継者も、初代から数えて何代かの間は“向こう側”から探し出していたらしいのだけれど、向こう側の状況が過酷になるにつれ、 夢見の女神 になれるほどの夢見の力を持った“穢れなき乙女”が見出せなくなってしまったらしいの。だから何代目かの 夢見の女神 が決心して、こちら側に“育成機関”を創ることにしたの。“こちら側”に夢見の力を育みやすいような環境の島を創り、“向こう側”で居場所

を失くした人々を招き寄せ、^{レグナリア・レヴァリム}「夢見の女神」の後継者たる人材を生み出す“住民”を創った。さらに、そんな女神としての資質を持った小女神が生まれたとして、徒に恋情に走ってその資格を喪わぬようにと、^{レグナース}小女神を年頃の異性から“隔離”する施設を創った。^{レグナリア・レヴァリム}そうやって“夢見の女神”候補を途切れることなく生み出し続けられる仕組みを構築したの。それが、この島の真実」

「……ちょっと待て。何言ってるんだ、あんた……。創られた？^{システム}仕組み？それじゃ、まるでこの島が^{レグナリア・レヴァリム}「夢見の女神」を生み出すためだけに存在しているみたいじゃないか。どういうことなんだ？この島は、一体何なんだ？」

フィグは混乱を抑えようとするかのように頭を抱え込んでつぶやく。その様子にラウラが哀しく笑う。

「混乱するのも無理ないよ。^{レグナリア}私も、最初にこの島の真実を知った時はそんな感じだったもの。……この島は、女神のために創られたもの。女神のために存在する、夢と現実との間に創られた箱庭なんだって。でもね、今はもう、女神のためだけのものだなんて私は思わないよ。この島にはもう、たくさん人間が住んでいて、それぞれの人生を生きているんだもの。私は女神になっても、そのことを忘れるつもりはないよ。だから、大丈夫だよ」

その言葉に、フィグはハッと表情を変え、改めてラウラの顔を見つめる。

「そうだ、ラウラ……！お前、^{レグナリア・レヴァリム}「夢見の女神」になったってどういうことだ!? もうすぐ俺の前からいなくなるって……お前は、これからどうなるって言うんだ!？」

ラウラは目を逸らすこともうつむくこともなく、真っ直ぐにフィグを見つめていた。わずかの時間も惜しむように。その姿を眼に灼き付けておこうとでもいうように。

「^{レグナリア・レヴァリム}「夢見の女神」の役目は、皆の夢が^{コシュマアル}「悪夢」に支配されることのないように、夢見の力で浄化すること。だから、その魂は夢の中を漂い続けるんだよ。……役目が終わる、その日まで。そして、魂を失って空っぽになる^{からだ}肉体は、この島と同化して世界の一部になるんだって」

「何だと……？」

フィグは呆然としてラウラを、そして徐々に透明度を増すフレアを見る。フレアはそれが真実だと示すように頷いて見せた。

「ええ、^{まほろし}あなた達の見ている私のこの姿も、夢の中を漂うフレア・フレーズの魂が紡いだ夢晶体に過ぎないわ」

フィグは目を見開き、青ざめた顔でふらふらとラウラに近づいていく。

「そんなことってあるかよ!? お前はそれでいいのか!? 一生誰かの夢の中をさまよって、身体さえ失くして、そんな、幽霊みたいな生涯……。なぜ他人の夢を守るためにそんな犠牲を払わなければならないんだ!? それはお前の人生と引きかえにするほど価値のあるものなのかよ!？」

フィグはラウラの肩につかみかからんばかりの形相で問いつめる。だがラウラは表情を変えることもなく、ただ静かに首を縦に振った。

「少なくとも私は、価値のあるものだって信じてるよ。夢って、人間の意識の深いところと繋がっているから。人によっては“無くても問題の無いもの”くらいに思われてるかも知れないけど、夢って、辛いばかりの現実の世界を忘れられる大切な世界だと思う。現実の中で打ちのめされて『もう立ち直れない』くらいに絶望しても、その夜に、もし優しい夢が訪れて心を慰めてくれたなら、翌朝には『また頑張ってみようか』って気に

なれるかも知れない。楽しい夢や優しい夢は、きっと人生を救ってくれるし、世界を優しくしてくれるって、私は信じてる」

ラウラの顔にこれから待ち受ける運命への悲嘆など欠片も無かった。その瞳には静かで揺るぎない決意の色だけが宿っていた。

「ねえ、フィグ。^{ゆめ}前に私、話したよね？いつか、私にしか紡げない夢で誰かを幸せにしたいって。その目標は、今も変わってないよ。私は、私の紡ぐ夢で皆の世界を守りたい。たとえ夜に見る夢の記憶のように皆から忘れられて、誰にも私のしていることを気づいてもらえなくても。人間としての人生を喪ってしまうことになっても。それでも私はこの道を進むって、決めたんだ。ただ、一つ……。この目標^{ゆめ}を選んだことで、私とフィグの道が分たれてしまうことだけが……。すごく、哀しいけど……」

静か過ぎるラウラの瞳に、^{シスター・フレア}フィグは悟った。もう何を言ってもラウラの決意を変えることはできないのだと。フレアの分身の言った通り、フィグにできるのはもうその決意を受け入れ、見守ることだけだった。

無力感にうなだれるフィグに、フレアがふと思い出したように声を掛けた。

「それで、フィグ・フィーガ。あなたの覚悟は決まったの？」

「覚悟？」

「もうッ！忘れちゃったの？私の分身があなたに訊いたでしょ？夢を追う覚悟はあるかって」

きょとんとしたフィグの顔に、フレアは「信じられない」とでも言いたげに腰に手を当て、ぷりぷりと怒り出す。

「こんな時に何を言ってるんだ？今、そんなことを考える心の余裕があるはずないだろ？」

「余裕なんて有ろうが無かろうが、チャンスは今しかないのよ。この島から“向こう側”へ渡れるのは、夢現剥離が起きている今しかないんだから！」

その発言に、フィグとラウラはぎょっとしてフレアに注目する。

「渡れるのか!? 向こう側へ!? だって、今まで成功した人間は一人もいないのに……」

「それはそうよ。だって今までこの島を出たいと夢見た人間の中で、運良く女神の代替わりに巡り合わせた人間^{タイミング}なんて一人もいなかったんだもの。夢見る力も実力も十分に持っているのに、唯一つ時機が合わないという不運のせいで夢破れていく人を見るのは、私も辛かったわ。だからあなたには叶えて欲しいの。『この島から自力で出ることは絶対にできない』という常識を、打ち破って欲しいのよ」

フィグは戸惑い、救いを求めるようにラウラを振り返った。

「何を迷ってるの、フィグ。叶えられないと思ってた夢が叶うんだよ？迷わず進めばいいじゃない」

「だけど俺は、こんな形で夢を叶えたかったわけじゃない。向こう側へ行く時はお前も一緒になって、ずっと思ってきたのに……」

「私はもう道を選んだんだよ。フィグとは一緒にいられない道を。だから、今度はフィグが自分の道を選ぶ番。フィグの人生はこれからも続いていくんだから、どうしたいのか自分で決めなくちゃ」

「……お前のいない道を、一人で歩めって言うのか？」

「そうだよ。これは私が女神じゃなくても、ただの人間でも普通に起こることだよ。お互いがそれぞれの夢を追っていけば、その道が分たれてしまうことはある。一緒にいられなくなることはある。特別なことなんかじゃない、当たり前のことなんだよ」

だがフィグは答えを出すことも、言葉を発することすらもできず、ただ捨てられた仔

犬のような目でラウラを見つめ、立ち尽くす。その表情にラウラは苦笑し、安心させるように優しい声で告げた。

「……大丈夫だよ。私たちは、もう会えなくなるわけじゃない。離れ離れになっても、繋がっているものがあるから。フィグが信じて、本気で会いに来てくれるなら、私たちはまた出会うことができる。だから、フィグはフィグの夢見た道を行って」

「本当に、また会えるのか？俺が、向こう側に渡っても……？」

「うん。会えるよ。だから、会いに来て。私、ずっと待ってるから」

フィグはラウラの顔をじっと見つめた。物心ついた時からずっと見つめてきたその顔は、嘘をついている時の顔ではなかった。

しばし無言でラウラの言葉を反芻すると、フィグは強く拳を握りしめ、フレアを振り返った。

「教えてくれ、フレア・フレーズ。どうすれば向こう側へ渡ることができる？」

フレアはその問いに、微笑んで天を指さす。そこには未だ剥がれ落ち続ける空があった。

「あの“穴”よ。この島は夢だけでできているわけでも、現実だけでできているわけでもない、その両者が混じり合う場所。2つの世界をつなぐ場所。夢現剥離とは、この島を構成するその“夢”と“現実”の2つの要素が分離しようとしている状態を言うの。あの空の穴も、そうして夢と現実が引き裂かれることによりできたもの。すなわち、あの“穴”の向こうにあるのが現実世界——私たちが“向こう側”と呼ぶ場所よ。あそこへ飛び込めば向こう側へ渡れるわ」

「何だと……っ!？」

フィグは目を剥いて空を仰いだ。穴は既にかかなりの大きさにまで広がっているが、それはあまりにも高い場所にあり、地上からどれほどの距離があるのか見当もつかない。

フィグの心の内を察してか、フレアは力づけるように微笑みかける。

「大丈夫よ。 レグナリア・レヴァリム 夢見の女神 の継承が完了すれば、この山の カルデラ——つまりここから、火山が噴火するみたいに大量の レネジウム 夢雪 が噴き出すの。その勢いに乗せて、ある程度の高さまでは運んであげられるわ。そこから先は、あなたの実力次第だけだね。……一生に一度のチャンスに、賭けてみる気はある？」

フレアの問いに、フィグは「^{シルヴァーヘンクレスト}銀の匙杖」を握りしめ、強くうなずいた。

「……じゃあ、私はもう行くわ。この後のことは分かっているわね？ラウラ」

フィグへの説明を終え、フレアは確認するようにラウラの顔を覗き込む。

「うん。大丈夫」

ラウラは ^{コシュマール}悪夢 の詰まった卵を大切に胸に抱きかかえ、今にも泣きそうな顔でフレアを見つめ返した。フレアはそんなラウラに、ただ微笑んでみせる。何もかもから解き放たれた晴れやかな笑顔だった。

「あんたはこれからどうなるんだ？」

訊くべきかどうか散々迷った末、フィグは結局、躊躇いながらもそれを訊いた。ラウラの今後を思うと、訊かずにはいられなかったのだ。

「……さあ。私にも分からないわ」

あまりにもあっさり予想外の答えを返され、フィグは目を剥く。

「分からない!? あんた、それでいいのか!？」

「ええ。いいの。知らないことがあるって素敵なことよ。知らないからこそ見られる夢があるもの。『もしも生まれ変わることができるなら、今度は普通の女の子として人生を全うしたい』とか、ね」

その身体の透明度と反比例するように、フレアを包む光は徐々にその強さを増していく。ラウラとフィグは瞬きもせずに見守った。

「さよなら、ラウラ、フィグ。あなたたちの夢がずっと素敵なものであることを祈っているわ」

光が弾ける。周囲が一瞬白光に包まれ、何も見えなくなる。そして光の止んだ後、その場所にはもう何ひとつ存在していなかった。フィグは無言でラウラを振り返る。ラウラはフィグが何を言いたいのかを悟り、小さく苦笑した。

「私なら大丈夫だよ。ちゃんと、全部分かってこの役目を受け入れたんだもん」

ラウラは ^{コシュマール}悪夢 の卵を両腕で強く抱き締めたまま、湖へ向け歩き出す。フレアの紡いだ睡蓮の葉の道は既に消えていたが、ラウラはためらいもせず ^{かす}に水上に足を踏み出した。だがその足は湖水に沈むこともなく、ただ水面に幽かな波紋を刻んでいく。

湖の中央に辿り着いた時、ラウラは振り向き、フィグへ向け微笑んだ。

「じゃあ行くよ、フィグ。覚悟はいい？」

その問いに『はい』と答えてしまえば、別れの瞬間が来てしまう。できることならば、このまま永遠に唇を閉ざしていたかった。

だが、そうやって無言でラウラの顔を見つめているうちに、フィグは気づいてしまった。ラウラが今、笑顔の裏で必死に泣くのをこらえていることに。

(……そうだよな。最後は笑顔で別れたいって、お前なら思うよな。こんな哀しいだけの別れまでの時間を、永遠に引き延ばしてるわけにはいかないよな)

フィグは一度、大きく息を吸い込んだ。それから、ゆっくりと口を開く。

「ああ。覚悟はできてる。いつでもいいぞ」

言い終わり唇を閉じた瞬間、ラウラの足元の水が勢いよく盛り上がった。それはまるで水でできた繭のようにラウラの全身を包み込み、そのまま湖の底へと引きずり込んでいく。

「ラウラ！」

『杖 ^{レネジウム} を構えて、フィグ。私が沈みきったらすぐにでも 夢雪 が噴き出すから。頑張ってるね。私、信じてるよ。フィグなら必ず夢を叶えられるって』

睽からにじみ、零れ出ようとする涙を乱暴に拭い、フィグは ^{スプーン}匙杖 を構えた。

ラウラを沈めた湖はその後もしばらく波立っていたが、やがてそれも治まり、水面は

静まりかえっていった。代わりに水底からどンドン七色の光が溢れてくる。そして湖面に花が咲くように、大量の^{レネジウム}夢雪が姿を現した。それはすぐに湖を覆い尽くし、それでも止まらずに増殖し続け、雪崩のような奔流となってフィグに襲いかかってきた。

『今だよ、フィグ！』

湖の底から響く声に導かれるように、フィグは杖^{ワンド}を握った右手を前へ突き出した。

「夢より紡ぎ出されよ！エジプト神話より“^{マンジエト}太陽の船”！」

^{レネジウム}夢雪が吸い寄せられるように^{シルヴァースプーンワンド}銀の匙杖の周りに集まってくる。

それは一瞬の閃光の後に一艘の木船へと姿を変え、フィグを乗せて七色に輝く^{レネジウム}夢雪の波に乗る。^{プレシオサウルス}ガレー船を思わせる長く平たい船体と、^{プレシオサウルス}首長竜の首のように高く振り返った船首を持つそれは、天空を渡る太陽神の船だ。

船は噴水のように噴き上がる^{レネジウム}夢雪に真下から押し上げられ、上へ上へと昇っていく。フィグは船縁に必死にしがみつき、その振動に耐えた。

その高さは山の頂を遥かに超し、島が眼下に一望できるほどにまで達する。だが、そこで上昇は止まった。垂直に上へ伸び続けていた^{レネジウム}夢雪の流れは次第にその勢いを緩め、水平に四方へと広がりだす。

空一面が^{レネジウム}夢雪に覆われていき、^{マンジエト}太陽の船はまるでその虹色にきらめく雲海を漂っているようだった。

「ここがフレアの言う“ある程度の高さ”ってことか。ここから先は俺の実力次第ってことだな……」

フィグは船上に立ち上がり、^{シルヴァースプーンワンド}銀の匙杖を改めて握り締め、鋭く声を発する。

「“^{マンジエト}太陽の船”よ！天空を翔けろ！あの天上の穴まで俺を導け！」

その声に応じるように、船は^{マンジエト}舳先をわずかに持ち上げ、自らの力で浮き上がり始める。フィグは太陽の船が天空を進むイメージを頭の中に保ちつつ、現在地と目的の“穴”との距離を測ろうと上空を仰いだ。だがそこで、天空の穴に思いもよらぬ現象が起き始めていることに気づく。

「何だ!? あれは、まさか……穴がふさがってきているのか!?’

フィグは思わず愕然として叫ぶ。

まるで時間を逆に回しているかのように、剥がれ落ちたはずの空の破片が次々と浮き上がり、パズルのピースをはめ込むように空の隙間を埋めていく。^{レグナリア・レヴァリム}夢見の女神の継承完了により新たな^{レグナリア}女神・ラウラの夢見の力を取り込んだ^{レヴァリム}夢見島が、^{ゴシュマアル}夢現剥離と^{ゴシュマアル}悪夢の侵蝕により壊れた箇所の自動修復を始めたのだ。

「……まずい！夢より紡ぎ出されよ！“^{レネジウム}風神の風袋”！」

カルデラからの^{レネジウム}夢雪噴出の際に船内に雪崩れ落ちていた^{レネジウム}夢雪を^{シルヴァースプーンワンド}銀の匙杖ですくい上げ、素早く垂直に跳ね飛ばしながらフィグが叫ぶ。一瞬の閃光の後フィグの肩の上に現れたのは、風船のように大きくふくらんだ白い袋だった。

フィグが船尾へ向け袋の口をゆるめると、中から凄まじい勢いの風が吹き出す。船はその強風に押され速度を上げた。しかし天空に開いた穴は、そんなフィグの機転を嘲笑うかのようにさらに修復の速度を上げ、急速なスピードで閉じていく。

「くそっ……ここまで来て間に合わないのかよ!?’

絶望の呻きが唇から零れる。その時、ふいにどこからか声が聞こえた。

『“夢”よ、彼の船に翼を与えよ』

それは初めて聞く声だった。直後、船の両舷で何かが光を放つ。その光はすぐに、白銀にきらめく鋼鉄の翼へと変わった。

『“夢”よ、彼の船の道筋に虹の橋を架けよ』

再び声が聞こえた。先ほどとは違う声だ。直後、光が弾け、天空の穴と船との間にレールのような虹の橋が結ばれる。

『“夢”よ。彼の船の船尾にジェットエンジンをお願い。燃料はもちろん、^{レネジウム} 夢雪 でネ』

今度はどこか茶目っ気のある女性の声だ。直後、閃光とともに船尾に巨大なエンジンが現れ、白銀の炎を噴出する。船はほぼ垂直な虹の橋の上を白銀の炎を上げながらロケットのように駆けていく。

「な……!? 何だ!? どうなってるんだ!？」

必死に船にしがみつき、その振動に舌を噛みそうになりながらも、フィグは疑問の声を漏らさずにはいられなかった。その耳に再び声が聞こえてくる。

『どうか叶えてくれ。我々の宿願を……!』

『我らの“夢”を、君に託す。つないでくれ、希望を』

『ずっと待っていたんだ。僕たちの“夢”を継いでくれる人を』

『これは叶わない夢なんかじゃないんだって、私たちが夢見たことは無駄なんかじゃなかったんだって、証明して!お願い!』

フィグへ向け語りかけられるいくつもの声、そして願い——それは船の中に雪崩れ落ちていた無数の^{レネジウム} 夢雪 の塊から聞こえていた。

「^{レネジウム} 夢雪 が……しゃべった? こいつら、意思を持っていたのか?」

『ううん。それはちょっと違うかな。これはね、意思じゃなくて想いのカケラ。^{レマギア} 夢術の源となる^{レフロウム} 夢粒子はね、誰かが何かを夢見た時に、この世に生み出されるの。実現する夢だけじゃなく、叶わず破れた夢のカケラたちも、この島の水や土や空気の中を漂って、やがては別の誰かの夢となり、この世に紡ぎ出されるんだよ』

「ラウラ!」

その声は島から吹く上昇気流に乗って聞こえてきた。

『もう大丈夫だね、フィグ。この島を出て行けるね』

見下ろせば、島はもう遥かに遠い。七色の^{レネジウム} 夢雪 の雲に包まれた故郷は、まるで青い海に縫い留められた宝石細工のように輝いて見えた。

「ああ。もう大丈夫だ。ありがとう、ラウラ」

万感の想いを込めて囁くと、柔らかな風が頬を撫でた。不思議とラウラが微笑んでくれているような気がして、目頭が熱くなる。

『行ってらっしゃい、^{ゆめ} フィグ。忘れないでね。もし旅の途中でフィグが夢を忘れそうになったら、私が“希望”を送るから。この島で育まれたフィグの夢の原点を、子どもの頃のあの想いを、思い出させてあげるから。だから安心して旅を楽しんでね。フィグの夢見たどこまでも“果てのない”旅を……』

どこまでも明るい声がフィグを送り出す。振り返れば天空の穴はもう目の前だった。船は吸い込まれるように穴に飛び込んでいく。

瞬間、視界が闇に覆われた。何も見えないまま、ただ凄まじい引力のようなものに船が引っ張られていくのを感じる。まるで底無しの穴の中に猛スピードで落ちていくようだった。フィグは最早座っていることさえできず、船底に倒れ伏し、へばりつく。

やがて船は闇を抜け、目を開けていられぬほどの光の渦へと飛び込んでいく。視界に一瞬、青空と雲と太陽が映ったような気がしたが、それを確認することもできぬまま、

フィグは強烈な重力負荷にも似た圧迫感に意識を失っていった。

その日、一艘の船が天空の穴から島の外へ旅立ったことに気づいたのは、ごくわずかの限られた人々だけだった。

早朝にも関わらず、島民のほとんどは何かで導かれるように自然と目を覚ましていた。だが彼らの視界に映ったものは、薄紅から紫のグラデーションを描く美しい夜明けの空に、淡いヴェールのような虹色の雲がかかっている光景だけだった。

やがて、夢のように美しいその空から、陽光に照らされたクリスタル・ガラスのように七色にきらめく雪が降ってくる。それは地に降り積もり、全てを覆い尽くし、^{コシュマアル}悪夢に換えられた島を美しい夢の姿へと塗り替えていく。

それは未知の光景ではなかった。いつか夢追いの宴のフィナーレで ^{フィーユ・レヴァリム} 夢見の娘 ^{レグナス} となった小女神のドレスに現れた光景だった。

「やがてこの島を訪れる……数百年に一度の夜明け……」

^{レグナスコラ} 小女神宮の礼拝堂の 薔薇窓 越しにからその景色を眺めながら、キルシェはいつか耳にした言葉を口の中で繰り返す。

礼拝堂には小女神宮の全ての人間が集められ、女神への祈りを捧げていた。

「今、新たなる ^{レグナリア・レヴァリム} 夢見の女神 ^{コシュマアル} がその座に就かれました。島を ^{レグナリア} 悪夢の手から救ってくださった新しき ^{レグナリア} 女神・ラウラに感謝を捧げ、役目を終えられた ^{レグナリア} 女神・フレアの安らかなる眠りを祈りましょう」

シスター長アルメンドラの言葉の後、鐘楼の ^{カリヨン} 組鐘 ^{レクイエム} が厳かに鎮魂歌を奏で始める。だが ^{レグナス} 小女神たちは心ここにあらずの様子でただ空から舞い降りる雪を見つめていた。

「ラウラ……あんた、無事に辿り着けたのね」

どこへ向けて呼びかけたら良いのか分からないように、キルシェはただ虚空へ向け呟く。

「あんた、まだ死んだわけじゃないんだもんね。きっと、私のこと、見ててくれるよね……？」

今にも涙声に変わりそうなその呟きは、鐘の音とシスターたちの祈りの声に溶け混じり、消えていった。

「……………う…っ…」

小さな呻き声とともに、フィグは目を覚ました。ぼんやりする意識でまず感じたのは、浮遊感にも似たゆるやかな波の振動だった。

フィグはゆっくりと目を開け、身を起こす。

穴に ^{フレシオサウルス} 飛び込む前と変わらず、フィグは船の上にあった。ただし鋼鉄の翼やエンジンは消え、^{フレシオサウルス} 首長竜の首のようだった船首も折れ、船自体もあちこちが傷つき削れてみすぼらしい姿に変わり果てていた。

「ここは……？俺は、辿り着けたのか……？」

目に映るのはどこまでも続く海原とその上に広がる空ばかり。静かな波間に一人漂い、不安を感じ始めたその時、フィグの耳が遠く微かに響く汽笛の音を拾った。

「船か……!？」

目を凝らし水平線をにらむと、こちらへ向け近づいてくる船影がある。エンジンの音とスクリューの波を立てながら走ってくるそれは、鋼鉄の船体を持つ漁船のようだった。フィグは船上に立ち上がり、上着を脱いで旗代わりに振りながら、その船を待った。

終章 20xx年、^{ロンドン}倫敦

ロンドン中心部、^{アンダーグラウンド}地下鉄の^{ライン}ベイカールー線と^{ライン}ピカデリー^{クロス}線が交差する^レスター・スクエア駅。そこからほど近い^{パブ}大衆酒場を彼が訪れたのは、ウェストミンスター宮殿の大時計が午後6時を指す頃だった。背に大きな荷物を負った、いかにも旅行者という風体の青年を、店主は温かく迎え入れる。

「いらっしやい。注文は何にする？」

「ライト・エールを半^{パブ}パイントとキドニー・パイを一つ、付け合わせはチップスで」
慣れた様子で注文を済ませテーブルに着くと、隣席の既にだいぶ出来上がった様子の男が話しかけてきた。

「やあ。君も旅行者か？」

「ああ。今朝イギリスに着いたんだ。そちらは家族旅行か何かで？」

青年の視線の先には、つまらなそうな顔でプディングをつつく16、7才と7、8才と思しき二人の少年の姿があった。

「ああ。妻の実家がこっちでね。里帰りにつき合うついでに観光旅行というわけさ」

そう言いながら男は、何が可笑しいのか大声で笑い出す。

「パパお酒呑み過ぎ。ママが戻って来たら怒られるよ」

「何を言う。旅行の楽しみと言ったら現地の美味しい酒を味わうことではないか。私はこれくらいではまだまだ酔わんぞ。君、スタウトはもう呑んでみたかね？おすすめの銘柄があるんだ。君もぜひ呑んでみたまえ！」

陽気に笑い肩を叩いてくる男に、青年は苦笑いを浮かべ適当に相づちを打つ。

「これのどこが酔ってないって言うんだか……。保護者の自覚無さ過ぎ。子どもを放置してる罪とかで捕まっちゃえばいいのに」

二人兄弟の兄の方が辛辣に吐き捨てる。一方弟は興味津々の表情で青年の姿を眺めていた。

「ねえねえ、何で腰に空っぽの瓶を二つも下げてるの？」

「空っぽ、か……」

青年はくすりと笑い、腰に吊るしてあった硝子瓶をベルトから外して少年の目の前に置いた。

「君にはただの空瓶にしか見えないだろうけど、この中にはそれはそれは美しい白銀の雪が詰まっているんだ」

「えー？何それ」

弟は不思議そうに首を傾げ、兄の方はただ白けたような顔で瓶を一瞥する。

「ほうほう！常人の目には見えない雪の詰まった瓶か！なかなかロマンティックそうな話じゃないか！旅先での醍醐味の一つは偶然出会う不思議な物語や言い伝え！君、ぜひ語ってくれたまえ！」

酒席での余興とばかりにすっかり話を聞く気になっている男の様子に、ほんの一瞬だけ躊躇いの表情を浮かべた後、青年は語り始めた。彼の生い立ち、空から夢の結晶が降ってくる美しい故郷の島の話、そして幼馴染と別れこの世界へやって来た経緯までを。

「おお……夢と幻想に満ち溢れた島か……。行けるものなら、私も是非行ってみたいものだ……。君、作家志望か何かなのかね？これから出版社でも探すつもりかね？L・M・モンゴメリやJ・K・ローリングのように」

酔った男はそれをただの“物語”と信じて疑わない。

「まあ、物語の語り口としてなら面白いのかも知れないけどさ“異世界から来た旅人”なんて話、よくそんな真面目な顔で言えるよね。酔っ払いと子ども相手だからってイマドキ信じないよ」

二人兄弟の兄の方はそう言ったきり、もう興味はないとばかりにグラスの中のサイダーを呑み始める。素直に瞳を輝かせたのは弟一人だった。

「じゃあ、その瓶の中には ^{レネジウム} 夢雪 ^{レマギア} が入ってるんだね!? 今でも ^{レマギア} 夢術 ^{レマギア} が使えるの!？」

「こらこらエミル、無理を言ってお兄さんを困らせてはいけないよ。おや?もう ^{グラス} 杯が空っぽだ。では私が取って来よう。君は何がいいかな?」

「じゃあ、あなたのおすすめのスタウトを」

男が酒を取りに席を立つと、青年はおもむろに首から何かを外した。それは、柄の先に羽根飾りのついた銀のスプーンのペンダントだった。

「よく目を凝らして見ていてごらん」

言って青年は瓶のフタを開けると、その中から見えない何かをスプーンですくい出した。

「夢より紡ぎ出されよ。J・M・バリー著『ピーター・パンとウェンディ』より“ティンカー・ベル”」

青年がスプーンを傾けると、それまで何もなかったはずのテーブルの上にポウッと白銀の光が点った。最初は球体だったその光はすぐに光り輝く小さな人の姿へと変わる。背に透き通った羽を生やした小^{ピクシー}妖精の少女は、光をまき散らしながらテーブルの上をくるくる踊ると、弾けるように消えた。

弟は手を叩き歓声を上げ、兄の方は口をあぐりと開け、サイダーのグラスを危うく取り落としそうになる。

「すごいすごい!本当に夢を紡ぎ出せるんだ!ねえねえ、それであなたは、幼なじみの女神様とまた会うことはできたの?」

無邪気な問いかけに、青年は一瞬無言になった後、遠くを見るような目で答えを返した。

「.....残念ながら、まだ、だな。いろいろ手段を講じてはいるんだが。今夜もまた、一つの方法を試してみるつもりだ」

深夜零時。明日の目的地の下調べや荷物の整理を終えやっと人心地ついた青年は、ホテルのベッドに身を投げ出し目を閉じた。

夕刻の酒の名残りか、眠気はすぐに訪れた。ふわふわとしてひどく心地の良い波のような睡魔に、青年は抗わずそのまま身をゆだねる。

一瞬の意識の空白の後、気づけば青年は白い霧の中に立っていた。自分以外何も見えない ^{ミルキー・ホワイト} 乳白色の世界で、しかし青年はあわてることも取り乱すこともなく、むしろこの場面を待ち望んでいたとでもいうように、ゆっくりと口を開いた。

「夢より紡ぎ出されよ.....“紅線”」

白銀の光が弾ける。直後、青年の足首にふわりと紅いリボンが現れた。蝶々結びのそのリボンは片方の端だけが長く、その先は白い霧の彼方へと続いている。

縄でも足枷でもないそれはいかにも頼りなく、まるで「いつでも自由に解いていいんだよ」とでも言いたげに、ゆるやかに風に揺れている。

「全て、俺に委ねるとでも言うつもりか?.....ばかだな。今さら他の相手なんて考えられるわけないだろう」

青年は苦笑してその場に屈み、何かに引っ掛ければ簡単に解けてしまいそうなそのリボンを強く、固く、結びなおした。

「この先に……いるのか？」

高鳴る胸を押さえ、青年はリボンの端を辿り白霧の中を進んでいく。

やがて霧は晴れていき、目の前に野原が広がった。まるで苺の実を敷きつめたように赤い野原だ。まるで赤い細波のように風が吹くたび揺れるのは、クリムゾン・クローバー 赤花詰草 の赤い花穂。

そこは、幼い頃によく遊んだ ストロベリーキャンドルフィールド 苺口ウソクの野 だった。空には翼を生やした船のような形の雲がいくつも浮かび、そこから絶えず七色の雪を降らせている。

そして赤い野原の真ん中には、苺の花のような真っ白なドレスを着た人影があった。長いスカートをふわりふわりと風に泳がせるその後ろ姿に、青年は一瞬息をするのも忘れて立ち尽くす。

逸る気持ちを抑えながら、それでもどこか不安をにじませながら、紅いリボンのつながる先、その人影へ向け、青年は呼びかける。かつて故郷の島で、飽きるほどに呼んできた彼女の名を。

その声に弾かれたように、小さな肩がぴくりと跳ね、彼女が振り返る。大きく見開かれたその瞳が次第に潤んでいくのを、青年は静かに見守った。

「……信じてた。きっと、会いに来てくれるって」

懐かしいその声は、まぎれもなく青年のよく知る幼馴染のものだった。

「……ごめん。遅くなって」

歩み寄り、目の前で謝罪の言葉を告げる。彼女はそれを否定するように激しく首を横に振った。

「信じてた。でも、本当は、ずっと怖かったんだ。私がこうなってしまった以上、この ホンシエン 紅線 はやっぱり切るべきなんじゃないのかって、ずっと迷ってた。でも、あなたがあの時『勝手な決めつけで一方的にこの“糸”を切られてたまるか』って言ってくれたから……」

青年は彼女の肩に手をかけ、ゆっくりと首を振る。

「これで良かったんだ。この ホンシエン 紅線 がまだ繋がっているおかげで、俺たちはこうして再び会うことができた。そうだろう？」

「……私でいいの？だって、私はもう……」

「いいんだ。たとえもう現実では会うことができなくても、……夢の中なら毎晚会えるんだろう？これからは」

青年の答えに、彼女は泣き笑いのような顔で微笑む。

「うん。あなたが世界中のどこにいたって、いつまでもずっと一緒だよ」

「だったら、構わない。世の中にこんな恋がひとつくらいはあってもいいだろう？……と言うか、お前の方こそ俺でいいのか？俺はお前とは違って、これからも普通に歳をとり続けていくし、そのうちには……」

その先を躊躇って言葉を切り、青年は目の前の幼馴染の姿をじっと見つめる。

その姿は別れた当時とまるで変わらない。むしろ青年の背が伸びた分、小さくなって見えるほどだ。

「いいんだよ。いつか置いていかれるとしても、思い出は残るから」

そう言って、彼女は青年の顔をじっと見上げた。

「私ね、いろんな人の夢の中を渡り歩くようになってから、思うようになったことがあるんだ。……人間って、思い出を集めるために生きてるんじゃないかなって。もちろん

思い出は楽しいことばかりじゃない。忘れられないくらいに悲しくて辛い思い出もあると思う。でもね、本当に嬉しくて、幸せだったっていう思い出は、そのイメージを何倍にも増幅されて記憶の中に刻まれるんだよ。それはたとえ歳をとって、自分の名前や家族の顔さえ忘れてしまって、その思い出の意味すら本人に分からなくなってしまったとしても、決して消え去ることはなく、頭のどこかに残り続けるんだよ」

言って、彼女は微笑みながら周囲の景色を指し示す。

「この野原も、ここに降る雪も、全てあなたの記憶の断片から構成されたもの。たとえもう二度と戻れない場所でも、会えない人でも、記憶の中には残り続ける。それはたとえ現実の中で、時の流れや様々な事情で奪われてしまったとしても、決して失われることのないものなんだよ。そして記憶の中に残り続けるなら、いつか再び会うこともできる。心の中や、夢の中、あるいは命の終わりの走馬灯の中で。いつかひとりでこの世を旅立つ時が来ても、優しい思い出たちと一緒になら、きっと寂しくない。そう、思うんだ」

「……そうか」

短く答える青年の脳裏には、わずかの躊躇いも不安の翳も見せず、微笑みながら消えていったかつての女神の姿が浮かんでいた。

「だから、思い出を紡いでいこう。これからは、ふたり一緒に……」

青年は返事の代わりに、言葉もなく彼女の身を抱きしめた。朝が来れば夢の終わりとともに儂く消えてしまうそのぬくもりが、それでも今はしっかりと肌に伝わることを確かめるために。

「……会いたかった。長かったよ。振り返ってみればたったの数年でも、俺にとっては……」

「うん……。そうだね。たったひとりで、見知らぬ世界で、大変なことがいろいろあったよね」

彼女は幼いままの手のひらで、大きな背中を優しく撫でる。そして改めて青年の顔を見つめ、唇を開く。

「おかえりなさい、フィグ」

その瞬間、フィグの脳裏にこれまでの旅の記憶が一気に駆け巡った。自ら望んで選んだ旅路でも、育ってきた環境とのあまりの違いに苦しむことは多々あった。二度と戻れない故郷が無性に恋しくなって胸を苛まれることもあった。それでも今この瞬間は、全てが正しい選択だったのだと受け入れることができる。

「ただいま、ラウラ。……お前に話したいこと、見せたいものがたくさんあるんだ。俺がこれまでこの世界で見てきたもの、美しいと圧倒された全てのものたちを、お前にも共有してもらいたいんだ。たとえ肉体は一緒に旅ができなくても、これなら一緒に旅しているのと同じことだろう？いつかあの丘で約束した通りに」

ラウラは一瞬驚いたように目を見張り、涙を零しながらうなずいた。その顔を見つめながら、フィグは改めて決意する。

初め、“果てのない”旅をすることは彼だけの夢だった。けれど今は、彼女のためにも旅を続けようと、強く思う。

誰かの悲しみや痛みを晒され続ける彼女に、ほんの束の間でも楽しい思い出、美しい夢を贈れるように。彼女の夢が絶望だけで塗りつぶされてしまわないように、これまでにこの世界の中で見つけてきた“希望”を、教えてあげようと思うのだ。

「この世界は、思っていたより悲しい世界だった。でも、思っていたよりずっと強かで、綺麗なものもいっぱいあるんだ」

おまけのリンク集

- [「夢の降る島シリーズ」サイト版TOPページ](#)
- [「夢見の島の眠れる女神」参考文献リスト](#)
- [使用画像の素材集リスト](#)
- [「夢見の島の眠れる女神」用語集（総合）](#)
- 「夢見の島の眠れる女神」[ファンタジー用語集](#)
- 「夢見の島の眠れる女神」[オリジナル設定用語集](#)
- 「夢見の島の眠れる女神」[パワーストーン辞典](#)
- [ファンタジーな雑学・豆知識](#)（←サイト版のおまけコーナーです。）
- [ファンタジー資料参考文献（城・宮殿）](#)
- [ファンタジー資料参考文献（ファッション・軍服・防具）](#)

※この本は[オリジナル・ファンタジー小説サイト「言ノ葉ノ森」](#)に掲載している「[夢の降る島シリーズ1～夢見の島の眠れる女神](#)」ルビ無・ファンタジーレベル強V e rの電子書籍版です。電子書籍版の都合上、サイト版と比べて機能が減っていますがご了承ください。

夢見の島の眠れる女神2 【用語解説機能付】

<http://p.booklog.jp/book/119429>

著者：津籠睦月

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mtsugomori/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/119429>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト